

宮城研修・研究旅行報告書



2018年3月

秋田大学大学院教育学研究科
教職実践専攻（教職大学院）

目 次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
『「想定外」を生き抜く力』片田敏孝防災講演DVD	3
NHKスペシャル『命と向きあう教室－被災地の15歳、1年の記録』	
宮城県東松島市立鳴瀬みらい中学校・制野俊弘	3
『ぼくたちわたしたちが考える復興 夢をのせて－宮城県石巻市立雄勝小学校 震災2年目の実践』徳水博志監修・指導DVD	4
宮城教育大学教職大学院との交流会：秋田報告	6
宮城教育大学教職大学院との交流会：宮城報告	7
宮城教育大学教職大学院との交流会：グループ討議	8
宮城教育大学との情報交換会	8
荒浜小学校跡地訪問	9
大川小学校跡地訪問	11
大川小学校跡地周辺の状況	12
雄勝小学校跡地訪問	14
徳水博志「防災教育プログラム」	17
徳水博志「震災教育プログラム」	18
雄勝ローズファクトリーガーデン	19
雄勝の地域と学校の復興を徳水氏の目指す取り組み	20
現職院生の感想	23
学卒院生の感想	25
登米市教育資料館	27
学校危機管理の授業での防災教育等プログラムの検討会	28
防災教育等プログラム案	30
石巻研修研究旅行プレゼン資料	76

はじめに

今回は、昨年度の岩手大学教職大学院及び岩手沿岸被災地（大槌・陸前高田）訪問に引き続いて、2回目の取り組みである。今回の研修研究旅行の目的は以下の通りである。

- 宮城教育大学教職大学院における防災教育に関する取り組みを調査する。
- 仙台市、石巻市の震災遺構の整備状況を調査する。
- 仙台市、石巻市の被災校舎とその周辺の状況、及び震災時の避難方法、マニュアル等の問題を調査する。
- 石巻市雄勝ローズガーデンファクトリーで組み込まれている防災教育・震災学習プログラムの内容と実施状況を調査する。
- 雄勝及び南三陸における復興状況を調査する。
- 調査の結果を踏まえて、防災教育等のプログラムを考案する。

同時に、院生にとっては自らの防災教育・訓練

の実践力を高める研修としての意味合いを強く持つものである。秋田にいれば、震災の状況や現在の復興の状況に触れる機会はほとんどない。秋田の教師として、また教師になろうとする者として、同じ東北に生きる者として、被災地から学ぶことは大きいはずである。

同時に、教職大学院として「修学旅行」兼「研修研究旅行」を実施し、院生全体が寝食を共にしながら、共通のものを見て、聞いて、学び、調べる体験をすることは貴重な機会となると思われる。

本研修研究旅行の実施にあたっては、宮城教育大学教職大学院関係者のみなさん、徳水さんなど、雄勝ローズガーデンファクトリーのみなさんのご協力・ご指導・ご支援に深く感謝する。

本研修研究旅行は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「東日本大震災後の教育復興の進展と復興教育プログラムに関する研究」（平成 27～29 年度）の一環として実施した。

【参加者及び日程】

参加者は以下の 29 名

教職大学院 1 年次

現職教員院生（11 名）：鑑基倫、石塚昭仁、泉拓行、牛丸靖浩、小松文彦、近藤明子、柴田創一郎、鈴木聡、藤原英樹、黒木良介、今野菜穂子

学卒院生（10 名）：伊藤紘成、稲継大輝、木村結花、木村陽平、近藤大地、佐藤貴大、竹内恭平、保達諒平、若松彩花、保坂迪菜

教職大学院 2 年次

学部卒院生（4 名）：菅原郁也、菅原美智、

辻明日香、野坂奨

引率教員（4 名）：神居隆、工藤正孝、佐藤修司、田仲誠祐

日程

【事前学習】

8 月 8 日（火）

10：00～11：30

『「想定外」を生き抜く力』片田敏孝防災講演DVD

12：30～13：30

『命と向きあう教室－被災地の15歳、1年の記録』宮城県東松島市立鳴瀬みらい中学校・制野俊弘、NHKスペシャル 2015.3.29 放送

13:30～14:50

『ぼくたちわたしたちが考える復興 夢をのせて－宮城県石巻市立雄勝小学校 震災2年目の実践』徳水博志監修・指導DVD

【研修研究旅行】

1日目(10月6日)

9:00 秋田大学出発

12:30 仙台市立荒浜小学校跡(仙台市若林区荒浜字新堀端 32-1)

14:30 宮城教育大学到着

15:00 交流研修会:宮城教育大学6号館2階教育実践研究室

～15:30 秋田大学院生発表:秋田の授業力向上について

～16:00 宮城教育大学院生発表:大川小・戸倉小訪問について

～17:10 グループ別交流(研究や院生生活について)

17:30 懇親会(萩朋会館)

19:30 宮城教育大学出発

20:00 ホテルサンプラザ到着(仙台市宮城野区榴岡 5-11-1 ☎022-257-3333)

2日目(10月7日)

8:30 ホテルサンプラザ出発:大川小跡地まで移動1時間半

10:00頃 大川小学校跡現地案内(1時間)
千葉大学教育学部の学生及び片岡洋子教授も同行
雄勝に移動して昼食

午後 雄勝小学校避難経路案内(1時間)

防災教育プログラム(1時間)

震災学習プログラム(1時間)

「雄勝花物語」雄勝ローズファクトリーガーデン(石巻市雄勝町字味噌作 24-3)

講師:徳水博志(とくみずひろし)

女川温泉 ゆぼっぼ(宮城県牡鹿郡女川町女川浜字大原 1-10、電話 0225-50-2683)

登米まで移動1時間

18:00 えびたけ旅館到着(登米市寺池九日町 59-1 ☎0220-52-2013)

3日目(10月8日)

9:00 教育資料館視察見学

旧登米高等尋常小学校 明治22年建築
設計者:山添喜三郎

10:00 登米市出発

南三陸まで移動40分

11:00 南三陸町防災庁舎跡見学、南三陸さんさん商店街訪問
途中で、昼食、見学等

16:00 秋田大学到着

【事後発表】

11月1日(水)

14:30～16:00

「学校危機管理」の授業において岩手調査報告及び防災教育等プログラムの発表・検討会
文部科学省教員養成企画室長参観

12月9日(土)

14:30～15:30

日本教職大学院協会実践研究成果公開フォーラムでの発表
一橋大学一橋講堂

『「想定外」を生き抜く力』片田敏孝防災講演DVD

ビデオを視聴し、防災における認識が大きく変化した。記憶のあるところでは、小学校の頃より避難訓練を行っていた。避難訓練では、地震や火災を想定するものであり、子どもの立場としては、いかに早く校庭に避難するかということを考えていた。また、学校側としても「押さない、駆けない、喋らない」という「おかし」を守り、少しでも早く避難することを求めているように思える。というのも、教頭先生や校長先生は、ストップウォッチで避難が完了するまでの時間を計り、全員並び終わった後に前回の訓練で避難にかかった時間と比較するとともに、過去の震災と関連づけて講評を述べていたからだ。確かに、できるだけ素早く避難することは非常に大切なことであり、集団生活を送る上ではなおさらである。しかし、今回のビデオを視聴し、さらに避難訓練の際に気をつけるべき点があるように感じた。それは、子どもたち一人一人が地形に関する正しい意識をもち、自分で考えて判断できるようにすることである。

ビデオ内において、片田は、震災が起きた際には「想定にとらわれてはいけない」「最善を尽くせ」「率先避難者たれ」という3つのことを強く主張していた。はじめに、「想定にとらわれてはいけない」という点に関しては、東日本大震災が予想外の出来事であり、予想外の被害が生じたことに起因すると考えられる。すなわち、この震災は、防災教育のパラダイムチェンジをもたらしたのである。今までのものの捉え方や予想や想定というものが大きく変わり、根

本的な考え方を改めなければならなくなったように思う。そのため、過去の出来事をもとになされた想定ばかりにとらわれるのではなく、次に挙げられている、その場に応じて「最善を尽く」さなければならぬ。その際に重要になってくるのが、知識と判断だと感じた。周囲の地形に関する知識をもつことによって、予測困難な事態に対してもリアルタイムで対応することができる。さらに、最善を尽くするためにはその知識を使って考え、何が最善かを判断する必要がある。そのため、日頃の授業において、持ちうる知識を基に場面に応じて考え、的確に判断していく能力を育てていく必要があると感じた。最後に、「率先避難者たれ」に関しては、自分の判断に自信をもち、行動に移すことができるようにする必要がある。日頃の学校生活では、子どもたち一人一人の自己肯定感を高めることが、子どもたちが率先して避難することにつながると感じる。

このように、避難訓練の時だけではなく、日頃の学校生活から防災訓練につなげていく必要があると感じた。また、避難訓練では、指定した場所に避難するだけではなく、現状を踏まえてどのように避難すべきかを子どもたちが考える機会を設けることも大切だと思った。予測困難な災害をマニュアルに頼るだけではなく、自分の頭でしっかり判断し行動できる子どもたちを学校生活全体で育てていくことが必要だと感じた。

【教職実践専攻1年次：伊藤紘成】

NHKスペシャル『命と向きあう教室―被災地の15歳、1年の記録』

宮城県東松島市立鳴瀬みらい中学校・制野俊弘

私たちは、石巻研修旅行の事前学習として『NHKスペシャル「命と向きあう教室～被災地の15歳・1年の記録～』を視聴した。このビデオは宮城県東松島市鳴瀬未来中学校での制野俊弘先

生の実践授業に関するビデオである。この実践は道徳の授業を通して、生徒たちに「命とは何か」を問う。実践は震災体験の作文をすることから始まった。作文を学級で発表することで、自身の震災

体験を友達に話す機会を設定し、生徒たちは今まで互いに気遣って触れることができなかったことに触れることとなった。作文を書き、発表することで「自分も変わるかもしれない」と前向きに取り組む生徒もいれば、「頼りっぱなしで負担になりたくない」と今までアピールできなかった苦しみをやく表に出すような生徒もいた。それぞれの思いを交わすことで、本来言えないような内容も学級で共有されていった。次第に震災には直接関連がないことも本音を話すようになっていく。親が離婚し「親に捨てられてしまっは、自分には生きる意味はないのではないか」と考える友達に、自分の経験と重ねながら励ます生徒も出てきた。生徒たちはそれぞれ抱えている悩みを友達に公開し、コメントをもらうことによって、自分の命や他の人の命について向きあっていく。実践の最後には「私が見つめた命」というテーマで生徒たちは作文を書いた。その作文の中には、「書きたくもないし、読みたくなかった。自分のことを知られたくなかった。なぜかうれしかった。自分の

知らない本当の自分を知れた。」と葛藤しながらも命と自分と向きあった軌跡が綴られていた。

よく「自分を見つめる」という言葉を聞くが、このビデオを視聴して、自分を見つめるということは結局「命を見つめる」ということになるのだと考えた。命への価値観の違いがある中、「命とは何か」を生徒たちは懸命に話し、これからどう生きていけばよいのかを考えていたのだと思う。もう死にたいと考えている友達がいることを知り、実際にどうやって声をかけていいのか分からないというのが普通だと思う。それは教師としても同じで、生徒の言葉を借りると「その人自身にはなれないから、本当の辛さは分かってあげられない。」ということが多くあると思う。その人自身にはなくても、教師として辛い思いをしている子どもが自分の気持ちを出しやすくしたり、子ども同士で互いの気持ちに寄りそえるような温かい学級を目指したりすることが私たちにできることはないかと考えた。

【木村結花：教職実践専攻 1 年次】

『ぼくたちわたしたちが考える復興 夢をのせてー宮城県石巻市立雄勝小学校 震災 2 年目の実践』徳水博志監修・指導 DVD

これは雄勝小学校の 5 年生の 1 年間の取り組みをまとめたビデオである。担任であり、ビデオの監修・指導を行った徳水先生は、「復興教育」を掲げ、被災した雄勝町のまちづくりと、子どもたちの心を癒やすことを目的に 1 年間にわたって実践を行った。まず、徳水先生が雄勝の復興教育に取り組もうとしたのは、子どもたちに震災体験と向き合わせ、震災による子どもたちのストレスや、PTSD といった症状を緩和し、乗り越え、子どもが希望を持ち、社会参加につながっていくような学びを実践しようという思いからである。

実践の内容としては、1 つは社会参加のための復興教育として、雄勝の名産であるホタテの養殖

の仕事と漁業の復興について総合的な学習の時間を通して調査・見学・体験などをしながら関わるという活動である。震災後に雄勝の漁師たちが立ち上げたホタテの養殖業を行う株式会社「OH ガッツ」と連携しながらホタテの養殖のための道具を作ったり、実際にホタテを獲ったりという活動を通して子どもたちの表情が生き生きしていた。個人の課題を解決する学習も、漁師さんとの関わりや、実際の体験が意欲的に調べることにつながり、グループ発表でも次々と疑問が出たり、課題が生まれてくるなど充実したものとなっている。

2 つ目は、心のケアと震災の記録残すための俳句・作文・絵・朗読劇、ジオラマ作りなどについて

である。これは震災を乗り越えるためのケアとして、PTSDなどで傷ついた記憶の穴を埋めようと試みたものである。こういった活動を通して、雄勝の記憶や家族の記憶を取り戻していくことが、未来へと進む土台へとになっていくものとなる。

3つ目は、子どもたちが未来へ向かって歩いていけるようにという願いから共同で制作した版画「希望の船」についてである。この版画には、震災の時に津波が来た様子や、避難所の様子その他、雄勝の復興を願って未来の雄勝や家族の姿が描かれ

ている。子どもたちが絵に表すことによって未来を思い描き、雄勝へ希望を持って生活使用とする姿が見られている。

こうした実践は、子どもの心理的な傷を癒すというだけでなく、地域の未来を考えるという意味でも効果的であるといえるだろう。秋田県という地域に配慮しながら秋田県で行っていくことのできる実践について考えていきたい。

【教職実践専攻1年次：木村陽平】



宮城教育大学教職大学院との交流会：秋田報告

10月6日、宮城教育大学教職大学院との交流会において、初めに秋田大学教職大学院生からの「秋田の授業力」について発表が行われた。内容は、秋田大学教職大学院院生の必修の「秋田の授業力の継承と発展」についてである。

本授業は、「秋田の探究型授業」の理論を学び、それを踏まえて教科に分かれて模擬授業を行うというものである。また、模擬授業だけでなく、事前研究、事後研究A、事後研究Bの3つを行うことが特徴である。事前研究は、校種・教科の壁を越えたグループに加え、教育実践センターの先生方に参加していただき、サブゼミを行う。事後研究Aは、模擬授業実践後にその場にいる児童役と教師役の全員で行うものである。事後研究Bは、模擬授業実践から数日後に再度グループで集まり、事後研究を行うものである。

交流会では、以下のことについて発表が行われた。まずは「秋田の探究型授業」に代表される授業の流れや理論についてである。学習の見通しを立て、自分の考えを持った後、ペアや集団で考えを深めて、最後に学習内容の振り返りを行うという、問題解決のプロセスを伝えた。

次に、本授業でも実際に行われている事前研究・事後研究と、実際に取り組んで感じたそれらの重要性である。

事前研究では、専門教科が異なり、教科の壁を越えたグループでの話し合いを通して、様々な見方・考え方に触れることができることを伝えた。例えば、外国語活動では、児童が英語を使う活動として初めにインタビュー活動を考え、児童が英語で質問したくなるような場面設定を作る必要があるという意見が挙がった。その後、運動会で使うTシャツのデザインを決める設定を提案したが、この設定に、教科横断的であるという意見もある一方で、英語を使う必要性がないという意見も挙がった。このように事前研究では、一つの場

面設定に対してチームで多くの意見を交換し合ったということを伝えた。

事後研究Aでは、事前の授業準備段階における教材研究の過程の情報提示をもとに、教師役と児童役の良い意味で遠慮のない意見交換がされた。それにより、秋田の先生方の指導や支援の手立てのテクニックや、そのみならず他教科の指導方法、教科横断的な視点での授業づくりについて学んだことを伝えた。

事後研究Bでは、模擬授業の文字起こしや最終板書の見直しから教師の発問

や指示、姿勢、授業の展開を振り返り改善版指導案を作成した。これら一連の活動を通して学んだことを二点伝えた。一点目は、PDCAサイクルを取りこぼしなくチームで実際に取り組むことができたことである。二点目は、手厚い事後研究を行うことにより、改善点を受けてその後具体的にどのように取り組んでいくか、見通すことで明日の授業につなげることができるということである。

発表後の、宮城教育大教職大学院の院生からの質問は、「学習課題の設定時に、子どもとの対話を通して、学習課題を練り上げると発表をしていたが、実際にどのようなものか」や「教科横断的な実施はどんなことをしているのか」、「事後研究A(リフレクション)の意見交流をする際の配慮はどのようなものか」、「本講義が役立ったことは何か」であった。

今後も宮城教育大学教職大学院や岩手大学教職大学院など、東北地方の大学院と交流を重ね、お互いに学びを深めていきたい。

【教職実践専攻1年次：近藤大地】



宮城教育大学教職大学院との交流会：宮城報告

宮城教育大学の教職大学院院生との研究交流会において、宮城教育大学の教職大学院側からは、学部卒院生の齋藤充志さんと現職院生の紺野知子さんに活動内容やその際に感じたことについて発表していただいた。東日本大震災の被害を私たち以上に身近に感じていたことを痛感し、その言葉



には心に迫るものがあった。本稿では2人の報告について取り上げる。

＜「大川小・戸倉小訪問を通して」齋藤充志さん＞

齋藤さんは震災当時や大川小学校・戸倉小学校を訪問して感じたことに加えて、理科の側面から津波について分かることを説明してくれた。

齋藤さんのいた角田市は津波の被害は無かったが、揺れによる家屋への被害があった。また、2週間以上にも及ぶ断水や停電が生活に大きな影響を与えた。そのため連日学校は休みになり倒れた家具をなおす手伝いをしていたらしい。

教職大学院の活動で大川小学校や戸倉小学校を訪問した際には人の所業を超えた被害を目の当たりにして衝撃を受けたという。想定外の事態に直面したときの判断する力の重要性を感じ、教員として働くようになったら、特に日頃からの防災教育に力を入れていきたいと話してくれた。

具体的な例として、理科の授業内で津波や放射線に関する正しい知識を身につけさせることが、子どもたちの緊急時の危機感や情報を見分ける力の育成につながるのではないかと考え、高波と津波の違いや $V=\sqrt{gh}$ で表される式から津波の脅威や走るスピードでは到底間に合わないことを説明してくれた。

学校で失われる命があってはならない。そのために教育現場に出て「即戦力」としてできることは何かを考える必要があるということを私たちに実感させてくれた。

＜「大川小・戸倉小訪問から学んだこと」紺野知子さん＞

紺野さんは現職という立場から、被災地の訪問を通して感じた学校や教員の在り方について発表してくれた。

赴任して新学期が始まるまでの期間は様々な仕事に追われて非常に忙しい。しかし、その忙しい中でも、避難のしかたや立地条件、子どもたちの命の守り方を確認しておくことは必要不可欠のものだと話して

くれた。大川小学校や戸倉小学校への訪問をして強くそう感じたらしい。



大川小学校では74名が犠牲になったのに対して、戸倉小学校では学校にいた91名が命を落とすことなく避難することができた。戸倉小学校では、地震が起きたとき、津波が来ることを想定して一次避難場所をとばして二次避難場所の高台に避難したことが、児童が命を落とさずに済んだ大きな要因と考えられる。この事実を受けて紺野さんは自分自身だったらどのような判断をしていたか考えさせられたという。

こうした経験を通して教員として、「想定外はきっと起こる」と考え、マニュアルや訓練は確認してつくりかえていくべきだと話してくれた。そして、教員一人ひとりが活かせる判断力・行動力を身につけ、緊急時には「短時間でベターな選択」をできるようにする必要があることを教えてくれた。

【教職実践専攻1年次：佐藤貴大】

宮城教育大学教職大学院との交流会：グループ討議



宮城教育大学との情報交換会



仙台市立荒浜小学校跡地訪問

私は今回初めて、東日本大震災で被害を受けた仙台市立荒浜小学校を訪問した。荒浜小学校は海岸線から約700メートル内陸に位置していた。震災が起こった2011年3月11日には、荒浜小学校に通う児童や教職員、荒浜地区の住民ら320人が避難した。荒浜小学校は、津波による被害を再び出さないために震災遺構として校舎が公開し、津波の脅威や教訓を伝えていた。この報告書では荒浜小学校で伝えられている津波の脅威や教訓を紹介する。



津波の脅威を伝えるために校舎の外観には実際に津波が到達した高さが示され、その高さは1階の教室を越えていた。2階の頑丈なベランダ壁と鉄柵も倒壊しており、津波の威力を物語っていた。また、校舎の外に置かれていた二宮金次郎像は折れていた。二宮金次郎像は津波によって台座ごと流され、東日本大震災の約8ヵ月後に荒浜小学校から100メートル離れた場所で発見された。かなりの重量があると考えられる二宮金次郎像を台座ごと100メートルも流してしまう津波に恐ろしさを感じた。校舎の2階に上がっても津波による被害が見られた。2階の水道の蛇口やその周辺は錆びついていた。さらに、2階の天井には津波の水しぶきの跡が残っていた。2階に避難しても安全ではなかったことがよくわかった。

荒浜小学校は訪問した人々への教訓として津

波に関する掲示物や物資が紹介されていた。掲示物として津波のメカニズムを理解促進させるものがあった。地震の発生と津波の関連性、津波の到達時間に関するものがあった。東日本大震災では、地震が発生してから約70分後に津波が荒浜を襲った。今回は津波が到達するまで70分あったが、もっと早く到達することもある。注意報や警報が出された時にはすぐに海岸から離れる必要がある。また、教訓を伝えるためのものとして、当時の荒浜小学校でどのよう

な避難、救助が行われたが時系列に沿って紹介されていた。校舎の3階には、避難した際に使用するトイレや毛布、緊急時の食料などの実物が置かれていた。実物を見ることによって自分がどのように準備をしておけばよいかがわかるようになっていた。

東日本大震災で大きな被害を受けた荒浜小学校の黒板には、「ありがとう」や「頑張ろう」など感謝と前向きな言葉がたくさん書かれていた。荒浜小学校は地域、生徒に愛されていたのだろう。生徒、地域に愛される学校を目指し、荒浜小学校訪問で知った津波の脅威や教訓を今後の自分にいかしていきたい。

【教職実践専攻1年次：保達諒平】





【仙台市立荒浜小学校跡地・震災遺構】

大川小学校跡地訪問

大川小学校は石巻市釜谷地区、北上川河口から3.8キロの川沿いに位置する。この地区には141世帯の集落があり、学校のフェンスの向こうには民家が多く密集していた。2011年3月11日、東日本大震災が発生し、高さ約10mの津波が町を襲った。地震によって海岸にあった数万本の松が流れ着き、橋に張り付いて津波をせき止め、川からあふれた津波と海からの津波の二方向からの津波であった。



大川小学校跡地に行くと、学校と向かい合うように石碑が建てられていた。そこには震災前の校舎の様子と校歌の他に、津波の犠牲となった児童78名、教員10名、そして地域の人々の名前が彫られていた。こんなにも多くの人の命を一瞬で奪ってしまうことのできる津波の脅威に鳥肌が立った。他にもねじれて倒壊した渡り廊下や、壁や窓の無い校舎が当時の惨状を今も物語っていた。民家や商店街、公民館があったという場所には、震災以前から草原が広がっていた地域だったのではと思わせるほど、何も無かった。

語り部の徳水博志氏の説明を千葉大学の教授・学生とともに聞いた。大川小学校の被害がなぜこんなにも甚大であったのか。それは、地震発生から避難までの「空白の50分」が原因であった。揺

れが収まった後、児童達は校庭に50分間留まっていたのだという。教員達は想定外の大地震に動揺し、どう避難するのか議論を交わしていたそう。この議論の中で、3人の教師が裏山への避難を提案するも、大多数の意見である三角地帯への避難が決まった。そしてようやく避難を始めた1分後、児童達は津波にのみ込まれてしまったのである。なぜ「空白の50分」が生まれたのか。それは現実的でない避難マニュアルにより、いざという時に

使えなかったからだと徳水氏は語る。形だけの避難マニュアルが、多くの命を犠牲にしたのだ。地域の住民が高台に避難し、スクールバスの運転手も子ども達を避難させるために準備し、津波が来ると住民からの注意喚起が叫ばれていた。津波が来ることは想定でき、避難を行うことは可能だったのである。しかしマニュアルが機能しなかったせいで適切な判断ができなかったのである。

徳水氏は「ベストな判断より、素早くベターな判断を。」と仰っていた。想定外の事態が起こったとき、悩んで時間を使ってベストな判断を下すよりも、一番良い答えでなくても素早さが命取りになることもある。その大切さを大川小学校の悲劇は私たちに示してくれている。

【保坂迪菜：教職実践専攻1年次】



大川小学校跡地周辺の状況

石巻研修旅行 2 日目は、午前中に大川小学校の跡地を訪問した。大川小学校の状況については、新聞やニュースなどの報道で何度か見たことはあったのだが、実際に訪れるのは今回が初めてであった。やはり、実際に大川小学校の跡地を見ると、いかに地震や津波の威力が凄まじいものであるかということを痛感させられた。2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災によって生じた津波は、大川小学校の建物を破壊しただけではなく、

まず、大川小学校跡地を訪問してみて、印象的だったのは、校舎と体育館をつなぐ渡り廊下が津波によって、破壊されていたことである。その壊された渡り廊下の状況から、当時の津波が、いかに勢いが強かったのかということが想像できる。改めて、津波の勢いの凄まじさや建物をも飲み込んでしまう恐ろしさを痛感させられた。また、その津波の高さであるが、10m にまで及んでいたということも分かった。実際に、津波が到達したとされる 10m の地点を見てみると、山の中腹にその津波到達点があり、想像していたよりもかなり高い位置にあった。自分の身長よりもはるかに高い地点にまで津波が到達していたのだということを



校舎と体育館をつなぐ渡り廊下跡

児童や教師、地域の方の尊い命まで飲み込んでしまった。今後このような悲劇を起こさないためにも、災害に対する対応のあり方を見直し、迅速に、かつ適切な判断ができるようになりたい。そして、子どもたちや地域の方々の安全を、学校としてしっかりと守れるようになりたい。まずは、津波による犠牲になられた方々のご冥福をお祈りしたい。



体育館跡

実感した。

これらの大川小学校の訪問から学んだことが 2 点ある。1 点目は、津波が来たらとにかく高い所へ避難するということである。今回のような 10m の



津波到達点

津波は、津波到達点を見ても実感することができたが、とにかく高い所へ向かわないと飲み込まれてしまうということを痛感した。どのような高さの津波が来てもいいように、高い所へ避難することは心に留めておきたい。2点目は、災害が起きた時、学校として正しい判断が下せることが大切であるということである。学校は子どもたちの安全を守ることはもちろんのこと、避難所として地域の方々を守ることも求められている。そのような災害が起こった時に、子どもや地域の方を災害から守ることができるように、常にあらゆる災害を想定して、瞬時にベターな選択ができるようになることが大切であるということを学んだ。

災害はいつ起きるか分からない。だからこそ、いつどのような災害が起きても人々の安全を確保できるように、今回大川小学校から学んだことをしっかりと実践していきたい。

【教職実践専攻1年次：竹内 恭平】



雄勝小学校跡地訪問

（１）雄勝小学校

リアス式海岸や川、多くの森林に囲まれ、自然豊かな石巻市雄勝地区は宮城県の北東部に位置する。そこには、旧雄勝小学校があった。現在は、石巻市雄勝地区４校の統合で雄勝小学校・雄勝中学校の併設校となっている。2011年３月11日、東日本大震災の大津波によって町の８割が甚大な被害を受けた。東日本大震災の発生直後、雄勝小では、住民が教職員に避難を呼びかけ、多くの児童を救った。



旧雄勝小学校跡地

現在は太陽光発電ソーラーパネルが全面に設置されている。

（２）東日本大震災、当日の避難状況

現地研修の中で４年担任の徳水博志さんからお話を伺うことができた。地震発生当初は、現場にいた教職員は、体育館や２階建ての校舎屋上への避難も検討していた。しかし、地域住民のより高いところへ、神社の方へという呼びかけにより、教員たちが先導し、児童とともに新山神社の方へ避難することとなった。

津波は、体育館を押し流すほどであり、波は校舎屋上まで達した。その後、より安全な場所へ避難するために、児童とともに、山頂を目指したと

いう。その際、周辺の地理に詳しい消防団の男性の提案で、峠を下った先にある工場へ避難したという。



実際の避難経路 新山神社への道





石段を駆け上ったところから見える景色

震災当日、津波が向こうから押し寄せてくる様子を実際の目の当たりすることを、実際の避難場所に立って想像したら本当に怖かった。研修時は雨が強く降っており、地面がぬかるんでいて滑りやすかった。震災が起こって避難する際は、天候に合わせた教職員の指示が必要だと感じた。

石段を駆け上がった先にある木に印がある。隣に並ぶと、私の目線とほぼ同じくらいの高さであったことから、非常に高い波が押し寄せてきたことが分かった。



津波到達ラインからみえる景色



津波到達ライン



徳水先生の講話 震災後の瓦礫の写真と津波到達時刻でとまったままの時計

（３）雄勝の現状～地域住民の危機感覚～

雄勝地区は現在、たくさんの重機と工事作業員の力で復興に向けて動いていた。

雄勝地区の震災当日に、無事に多くの児童や地域住民が避難できたことから、保護者や地域住民が防災を学校任せにせず、危機感を保っている様子がうかがえた。

普段から学校と連携し、学校行事や地域の活動での交流から、信頼関係が築かれていたと考える。神社への避難路も確かめる機会があったのではないと思う。

津波被害を受けた経験から、土地の特徴や、日頃の備え、避難時の行動をまとめ、学校の防災教育に活用することが大事だと学んだ。



雄勝地区の復興工事の様子

【教職実践専攻１年次：若松彩花】



女川温泉ゆぽぽ（女川町ＨＰより）



（女川町ＨＰより）

徳水博志「防災教育プログラム」

研修旅行2日目である10月7日（土）に、「雄勝ローズファクトリーガーデン」において徳水博志氏による「防災教育プログラム」についての研修会が開催された。我々は研修会の前に石巻市立大川小学校跡地や石巻市立雄勝小学校跡地を見学し、まだ震災の爪痕が残る場所に実際に訪れていたため、震災当時の状況を具体的にイメージしながら研修会に臨むことができた。

この「防災教育プログラム」は、津波災害の恐ろしさを再確認するためのものではなく、今後再び起きるかもしれない津波災害に向けて一人一人の津波防災能力の向上を目的としている。そのために、実際に震災当日に行った避難行動の4つの事例の検討を踏まえ、津波防災に必要な防災能力とは何か、この研修に臨む個々人が考え直すことが重要である。それが、震災後に教育に携わる者として必要不可欠な姿勢だと考えられる。

講師である徳水氏のお話の中で印象的だったのが、「教員も子どもたちも、災害を具体的にイメージする力を高めなければならないこと」である。普段の学校生活の中で、災害を強くイメージする機会は限定的である。おそらく、教員という立場から考えると避難訓練が真っ先に浮かぶだろう。

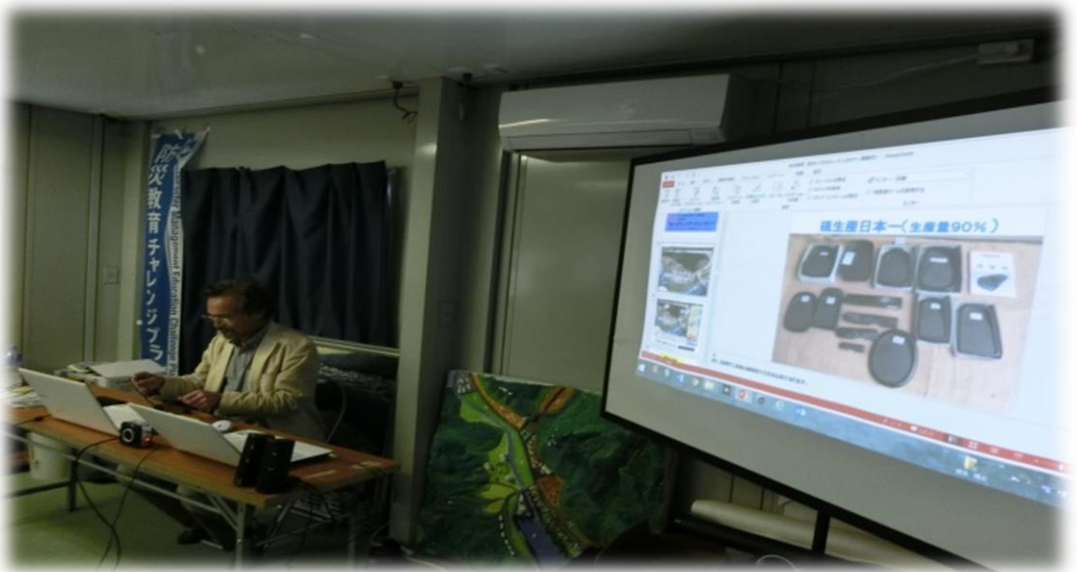
しかし、大川小学校の事例では震災当日に避難行動を指揮する校長は不在だった。つまり、管理職に避難行動を任せきりにするのではなく、正しい知識を持った上で、主体

的に判断する必要があると考えられる。このような学校経営意識を教職員一人一人が持つことが、教員にとっての津波防災能力を向上させることにつながるのである。子どもたちの立場から考えた際も、似たような考え方をすることができる。災害は必ずしも学校にいる時に発生するとは限らない。事実、宮城県内の小中高等学校の犠牲となった児童生徒353名のうち、約80%の278名は地域や自宅で亡くなった。何事もなく避難訓練を終えることができたからといって、児童生徒一人一人の津波防災能力が高いとは言い切れないのである。故に、「いつ・どこで・誰といても」迅速に自らの命を守るために避難行動をすることができるようになることが求められるのである。

大川小学校や雄勝小学校で起きたことは全く他人事ではない。将来、秋田県で発生してもおかしくない。今回の研修での学びを生かし、「もしもの時」に最善の判断を瞬時にできるよう、日頃から準備を怠らないようにしていきたい。

【教職実践専攻2年次：菅原郁也】

研修会の様子



徳水博志「震災学習プログラム」

防災教育プログラムに続いて、震災学習プログラムを受講した。このプログラムでは、復興教育を行うに至った背景や、取組の内容について話していただいた。

震災後、徳水先生が勤めていた低中学年の生徒は、活動意欲や学習意欲の低下が見られた。高学年の児童も同様に、様々な意欲低下が見られた。それに加えて、学習規律の乱れや乱暴な言葉遣いをする様子もあったという。しかし、子どもたちは教師の指示に反発したり無視をしたりしたわけではない。いわゆる学級崩壊とは異なる状態であった。学習指導方法の改善や生徒指導上の問題ではないと考え、子ども観を震災がらみの病理を発症した子どもたちという見方へ転換した。震災がらみの病理（トラウマ・グリーフ）を癒すことができるならば、前を向く力を得て、学習意欲の回復と生活意欲が回復できるのではないかという仮説のもと、教育実践を行った。

震災から数年が経ち、宮城県ではグローバル教育や学力向上施策などに力を入れるようになったという。被災して心に大きな傷を負った児童や地域住民にとって、その教育内容は現状と大きなずれのある内容だった。そこで、雄勝小学校独自の復興教育を教育課程に位置付けて実践を始めた。具体的な内容は、復興市で南中ソーランの披露や雄勝硯の工房で伝統工芸を作成する体験活動、仮設住宅に雄勝石の表札をプレゼントするなど、地域とのかかわりが非常に強い取組である。また、児童の心を癒すための実践として、あえて自分の震災体験と向き合い、記録する取組も行った。この実践は、俳句や作文を書くことで、直接的に震災体験と向き合うことの他、ジオラマ制作や版画制作など、創作活動を行いながら向き合うという取組である。

地域との関わりが強い実践では、児童の支援活

動が大人を励ますことへ繋がった。同時に、児童は自己有用感と自尊感情を高め、自信をもつことへ繋がった。児童と地域住人の関わりが相互に良い影響を及ぼしたのだと考えられる。自身の震災体験と向き合う実践では、俳句や作文で自分の体験を記録することで、自分の記憶を再構成することへと繋がった。また、ジオラマ制作のような、友達と楽しみながら作業し、間接的に震災の記憶に触れることで、少しずつ津波や震災に対する恐怖感を克服できたようである。

今回このプログラムを受講して、震災体験から目を背けるのではなく、順を追って自分の経験として丁寧に意味づけていることがとても印象的だった。大人でも辛く悲しいことから目を背けてしまう。まして小学生では、心に大きな傷ができただろう。その辛い記憶をどうすることもできず、不適切な言動として表出されてしまったが、それを癒すために教育課程を設定するという発想が、私にとって新しい知見だった。この先、つらい経験から不適応を起こしてしまう子どもと出会った場合、今回学んだ取組や考え方が子どもを助けるヒントになると感じた。教育課程として位置付けた学習でなくとも、徳水さ



さんから学んだ子どもに対する考え方や関わり方は、日々の教育に生かせるものである。子どもたちが地域の人と関わり合い、希望を抱いて生活していけるような教育を行っていきたい。

【教職実践専攻2年次：菅原美智】

雄勝ローズファクトリーガーデン

「雄勝花物語」は3・11の巨大津波で壊滅した石巻市雄勝町を「花と緑の力」で復興するために、被災した住民が立ち上げた復興プロジェクトである。その活動拠点が石巻市雄勝町内の「雄勝ローズファクトリーガーデン」である。

物語の始まりは、2011年8月に代表の徳水利枝さんが、津波で流された母親や叔母・従弟の霊を弔うために、瓦礫に埋もれた雄勝町味噌作の実家跡地に花を植え始めたことである。その年の9月に被災地緑化支援に入っていた千葉大学・園芸学部の秋田典子氏と学生と出会う、花畑造りが始まった。さらに、自宅を失った雄勝の方々のためにも故郷とつながる場として花畑をつくる物語を思い描いたところ、その物語は多くの方々の中に紡がれていった。



雄勝花物語HPから

雄勝ローズファクトリーガーデン設立の目的は、

- ①雄勝ローズファクトリーガーデンを活動拠点にして、被災地の緑化支援と被災者の支援活動を行うこと（支援部門）、
- ②被災地教育旅行や企業研修を行う団体及び個人に、植栽や除草等のボランティア活動の場を提供すること（教育部門）、③教育事業では語り部・防災教育の他に、自然体験学習、森林をテーマにした環境教育、ESD（持続可能な開発のための教育）を実施して交流人口を増やすとともに

に、子どもや青年を対象に復興の後継者を育てること（教育部門）

- ④体験教室&セミナー、花・ハーブ栽培、果樹栽培からジャムやワイン製造の事業によって新規雇用を生み出して、雄勝町の復興を後押しするとともに、雄勝町内に利益が落ちる「地域内経済循環」を構築すること（事業部門）

である。方針として掲げられているのは、被災地を儲けの対象にすることなく、目的を同じくする行政や各団体と連携しながら、住民主体の雄勝町の復興と持続可能な新しい町づくりを目指すことである。

徳水さんの話を聞いていて、とても明確な将来像を描いていることを感じた。例えば、今後はオリーブ栽培に目をつけて、石巻市と連携して6次産業化を目指すなどの具体的な目標を語っていたことである。町を変えるためには、強い信念と創造性が求められることを感じたと同時に、その力を子どもたちにも身に付けさせるよう教育の在り方についても考えさせられた。「雄勝花物語」はこれからも多くの人々によって語られていくだろう。

【教職実践専攻2年次：野坂 奨】



雄勝花物語HPから

雄勝の地域と学校の復興を徳水氏の目指す取り組み

1. 雄勝ローズファクトリーガーデン

二〇一七年一〇月七日、秋田大学教職大学院の研究研修旅行で、宮城県石巻市の被災地を訪問した。午前中、風が強く、冷たい雨の降る中、大川小学校跡、雄勝小学校跡を徳水博志氏に案内していただき、当時の緊迫した状況を語っていただいた。雄勝小跡では震災当日の避難ルートの一部を実際にたどることで、院生も感じるところが大きかったようである。その後、徳水夫妻が営む雄勝ローズファクトリーガーデンの一角にある仮設の建物で、徳水氏より、「防災教育プログラムー東日本大震災の巨大津波の教訓から学ぶ津波防災教育」「震災学習プログラムー被災児の心のケアの教育実践」を聞いた。

これらの徳水氏の取り組みは、ガーデンの活動の一環としてなされている。主にそのHP (<http://ogatsu-flowerstory.com/> 12月1日閲覧) と教職大学院訪問を通して、その目指すところと意義を考えてみたい。



2. ガーデンが目指す地域と学校の復興

ガーデンは二〇一一年八月に妻・徳水利枝氏が母親、叔母、従弟を津波で失ったことの弔いとして、実家跡地に花を植え始めたことが始まりであった。九月、千葉大学園芸学部の教員・学生との出会いを皮切りに様々な支援を受けながら花畑づくりが広がっていく。NHK等の番組でも取り上げられ全国的に広く知られるようになった。徳水氏の定年を機に、二〇一四年に、NPO法人「雄勝花

物語」を立ち上げる。その方針は、被災地を儲けの対象とすることなく、目的を同じくする行政や各団体と連携しながら、住民主体の雄勝町の復興と持続可能な新しい町づくりを目指すことであった。そして、以下の目的を掲げている。

①被災地の緑化支援と被災者の支援活動を行う。

【支援部門】

②被災地教育旅行や企業研修を行う団体、個人に植栽や除草等のボランティア活動の場を提供する。 【教育部門】

③語り部・防災教育の他に、自然体験学習、森林をテーマにした環境教育、ESD（持続可能な開発のための教育）を実施して交流人口を増やすとともに、子どもや青年を復興の後継者に育てる。【教育部門】

④体験教室・セミナー、花・ハーブ栽培、果樹栽培、ジャム・ワイン製造の事業による新規雇用の創出で雄勝町の復興を後押しするとともに、雄勝町内に利益が落ちる「地域内経済循環」を構築する。【事業部門】

徳水氏は自らの被災体験、喪失体験を抱えながら、雄勝小学校教師として子どもたちの心のケア（種々の表現活動）や復興教育（地域の産業学習、まちづくりプラン作成）にあたっていた。その基盤は、「子どもが一〇年後の地域復興の主体となるべき、地域の宝」という子ども観であり、「故郷を愛し、故郷を復興する社会参加」という学力観であり、「地域の復興なくして学校の再生なし」、地域復興に貢献するという学校経営観であった。学校は住民の復興活動を教材化し、子どもたちがそれを学び、自主的に復興活動に参加することで地域復興を担う未来の主権者に生まれ変わっていく。これらは、徳水氏が被災体験を抱えて荒れる子どもたちを前にした際、積み上げてきた実践知が通用しないことに苦悩する中から生み出されたものであった。

徳水氏の実践は教師としての定年によって終わらなかった。在職時からまちづくり協議会の一員として、自らが復興の主体たる大人としての姿を子どもたちに示してきたわけだが、それを雄勝花物語として教育の面を含み込みつつ、生業の復活、雇用の創出という地域の復興・維持にとって核心的な部分に取り組もうとしている。徳水氏の言によれば、雄勝小学校の子どもたちがまとめ、生活・総合発表会やまちづくり協議会で意見表明した「まちづくりプラン」をそれで終わりにせず、一貫してそのプランの実現に取り組んでいるとのことであった。

雄勝地区震災復興まちづくり協議会の住民運動の成果として、学校再建が決定した。残された大きな課題は、「雄勝を近い将来の限界集落から再生し、持続可能な町に復興すること」、「そのためにはなんとしても外部の若者を呼び込むことができる新規事業と持続可能な魅力ある町づくりが必要」になる。「若者の就労の場」を造り、「新規雇用を生み出し、外部から雄勝町に定住する人口を増やしていくこと」、そのための取り組みなのである。

『人とつながり希望を紡ぐ』この言葉は一步踏み出せば、地域の人とつながって足元から小さな希望を生み出し、さらにもう一步行動を起こせば、全国の皆さんとつながって大きな希望を生み出すことができるという、震災から立ち上がった私達の歩みから生まれた言葉です。希望とは与えられるものではなくて、自ら生み出すものであることを学びました。・・・被災地とつながり、全国の皆さんと一緒に「花と緑の力」で心を癒す花園を造り、雄勝の森・川・海のひとつながりの生態系と雄勝石やホタテ・ホヤなどの地域資源を生かした「地域内経済循環」を構築し、持続可能な新しい町づくりの物語を一緒に紡いでみませんか。

また、二〇一八年度に新設される学校については、以下のように触れられている。

雄勝小中併設校を地域から支え、雄勝の子ども

たちが故郷・雄勝を愛し、復興を継承する未来の主権者・主人公として育ってくれること。六〇〇年の歴史と伝統文化を継承してきた先祖の意志を引き継ぎ、愛する雄勝を震災から復興させて町を残し、次の世代に引き継ぐこと。震災復興と過疎からの再生という二重の課題を克服し、日本の地域再生のモデルを創ること。これが「雄勝花物語」の復興を、プロジェクトを起こした私達住民の強い願いです。復興活動の目的は持続可能な町づくり、復興手段は新規事業化による雇用創出、そして地域と世界を結びつけるグローバル後継者育成、復興活動は故郷への愛です。

雄勝花物語では、雄勝の森・川・海のつながりを生かした環境教育の場を提供し、地域復興と一体化した教育活動(E S D)を展開しており、開校する学校の子どもたちに対しては、「地域復興の主人公となってもらうために、地域教材の学習の場を提供し、外から学校教育を支える」予定になっている。「経済的利潤のためのグローバル人材の育成ではなくて、世界全体と雄勝地域をつなぐグローバルな発想と行動力をもった、地域復興と持続可能な地域の再生を担う主人公を育てる教育」を目指す。

徳水氏が「地域に根ざす教育」と「地域を育てる教育」に加えて、持続可能な経済に支えられ、つながりと希望が紡がれる地域を構築しようとしていることに深く敬意を表したい。

3. 教職大学院による訪問の意図と成果

秋田大学の教職大学院は二〇一六年度の発足であり、今年は2年目にあたる。昨年度は、1日目に盛岡で岩手大学教職大学院との交流を行い、翌日、岩手大学の院生とともに山田町立船越小学校、大槌町立大槌学園（新校舎への引越から1週間しか経っていなかった）を訪問し、校長や指導主事等から説明を受けた。3日目には陸前高田を訪問して帰秋した。今年度は、現職院生11名、学卒院生14名、付添教員4名が参加し、1年次はほぼ

全員であった。雄勝訪問の前日、仙台市立荒浜小学校跡（震災遺構）を訪問した後、宮城教育大学教職大学院との交流を行った。宮城教育大学では、大川小学校と戸倉小学校を訪問して学んだことに関する発表があった。昨年度の岩手大学との交流でも、院生が取り組んでいる防災教育に関する発表があり、被災地の教職大学院ならではの研究に触れることができた。

石巻訪問には、偶然にも千葉大学の学生と片岡洋子氏の一行との同席できて、東北にとどまらない関心の高さを感じることができたようである。3日目には南三陸を訪問した後、帰秋した。必修科目である「学校危機管理の現状と課題」の中にこの研究研修旅行を位置づけるとともに、防災やケア、復興に関する校内研修（現職院生担当）や授業・訓練（学卒院生担当）の指導案をそれぞれが作成して持ち寄り、検討する回を設定した。旅行に関する院生の感想を一部紹介する。

- ・学校でどのようにして子どもの命を守るかは、日頃の備えが9割、現実になったときの判断が1割のような気がする。
- ・地形によって津波が変わるという話から、勤務校及び周辺の地形、さらには歴史を知っておくことの重要性を学んだ。
- ・この研修で得た「実体験」を想像力に加えて、避難訓練やいざというときに生かしていきたい。
- ・徳水先生のマイナスの体験から目をそらすことなく、しっかり向き合うことでのりこえさせていく教育の方法や教え方は、日常の生徒指導等にも生かせることだと感じた。
- ・雄勝小学校の徳水学級の子どもたちが提案した町づくりのテーマがガーデンの理念と取組に結びついていることに感動した。災害が起こりうることを受け入れてその備えを怠らず、ふるさと雄勝への愛着を深める取り組みが素晴らしい。
- ・経済と教育をセットでとらえて地域をつくるという言葉が印象深い。グローバル人材育成ではな

い、地域のための人材育成は人口減を抱える本県も取り入れるべき要素が多々ある。

教職大学院はともすれば体制順応的、技術偏重的、標準依存的なものに流れる危険を持っているわけだが、徳水氏のような人との出会いを意図的に作っていくことで、新たな可能性も開けるのではないだろうか。被災地の状況を間近に感じ、巷間言われる「創造的復興」ではなく、「人間（本位）の復興」に向けた歩みを決して止めない生き様に触れられたことは、院生の教職人生にとってかけがえのない財産になったはずである。また、東北に生きる人間として、人口減少に直面する地方に生きる人間として、行政区域の枠を越えた協働の「つながり」が紡がれることを期待したい。

＊現地案内や受講プログラムは廉価ではあるが、有料である。ガーデンの運営に資するだけではなく、被災地の経済的自立への取り組みの一つにもなっている。

徳水氏の実践については「地域から『復興教育』へー石巻市雄勝地区の実践ー」『経済』2016年4月号、「『生存』の足場を創る現在の試みー小学6年生の『震災復興まちづくりプラン』ー」大門正克編著『生存の東北史』大月書店2013年、「被災を受けとめ 前を向く力を一自らの回復体験から生まれた＜復興教育＞」『教育』二〇一七年三月号、『森・川・海と人をつなぐ環境教育』明治図書二〇〇四年を参照。

日本学術振興会科学研究費補助金「東日本大震災における教育行政機関・職員の機能と実態に関する研究」（平成24～26年度）、「東日本大震災後の教育復興の進展と復興教育プログラムに関する研究」（平成27～29年度）に関わって、徳水氏には二〇一二年六月より聴き取り等で何度もお世話になった。

【教職実践専攻長：佐藤修司】

現職院生の感想

○今回の研修旅行を通じて、被災された方たちの災害への思いというのはそれを経験していない人たちと当然温度差があるが、現地であってもやはり風化していくものだという事を教職員の話から感じた。災害から教訓として学ぶ姿勢や知見をどう教育に活かしていくかについては、常にそれを発信し追求していく存在が必要である。災害に備えるまたはその知見を生かしていくための全体体制を変えていくことは難しいが、変えられるところを確実に変えていくことの積み重ねや、マニュアルなど現在あるものの見直しを共同で進めていくことが大事だと感じた。

○徳水さんのお話に宮沢賢治の「イッテ」の精神のことがあったが、今回の旅行はそれを一番に感じた。震災後、宮城にも岩手にも何度も足を運んでいるのに、被災地の状況を見に行っていなかったのは本当に恥ずかしいことだったと反省した。この取り組みを教職大学院のみならず県としての取り組みにしてほしいと願うほどである。分かっていたつもりでいたが、被災地の方々の苦しみ、悩み、またそこから進み出そうとする努力に心を寄せ、学び、伝えようとする姿勢が自分にはなかったと反省している。今回の学びを自分なりに整理し、自分の知識を高めるとともに、周りにもしっかりと伝えていきたい。

○一件の重大な事故・災害には300件ものヒヤリハットがあるという法則を逆から考えると、多くの防止策をすり抜けた場合、それが起こることになる。今回の研修全体として、学校の危機管理について生死を分けたのは学校内部と外部である地域の二つの要因が挙げられる。学校の立地を考慮に入れた三次避難先を予想したマニュアル、子どもの命を守ることを最優先にできる意思決定などの内部要因がある。外部要因には津波の高さの表し方、避難所指定のあり方、災害時の情報の伝え方などがある。これらのうち、どれか一

つでもできていたならば大川小学校の惨事は防げたのではないだろうか。

○宮城の現職の先生との情報交換から、いまだに復興が進んでいない現状や新たに生じている子どもの心の問題について知った。当時2～3歳だった子どもたちが小学校2～3年生になり、新たにストレス障害と思われる症状を呈しているのだという。当時の慌ただしさの中で親の愛情が十分に注がれなかったと思われる家庭状況が共通として挙げられるそうである。秋田に住む我々にはもう過去のことである震災が、宮城ではまだまだ続いている。



荒浜小跡からの光景

○秋田県南部の原籍校では想像できない津波に対する防災教育や震災学習について研修できたことがとても有意義だった。津波に対する教職員の意識を変えなければいけない現状、実際に地震発生時にどれだけ迅速にベターな判断を行い、子どもたちの命を守らなければいけないか、といった災害への備えや行動といった点で多くの教訓を学ぶことができた。宮教大の現職院生が訴えた新任校に行った際には、自校の防災・避難マニュアルを確認するといった視点は、今後意識して持ち続けたいと思った。東日本大震災を経験した今だから、勤務地の地域的特徴を理解し、起こりうるリスクに対して、全職員、児童と備え、地域を巻き込んだ

防災に取り組んでいく必要性を感じた。

○被災地や津波の被害を受けた小学校（跡地を含む）3校を訪れ、改めて自然災害のおそろしさや、防災教育、復興教育の在り方について考えさせられた。最も印象に残ったのは徳水先生の人間性。定年後も雄勝に残り、復興と教育と、何よりご自身の「震災の意味づけ」のために命を削って取り組んでおられたのが強く心に残った。マイナスの体験から目をそらすことなく、しっかり向き合うことで乗り越えさせていく教育の方法や考え方は、日常の生徒指導等にも生かせることだと感じた。今回の経験を生かし、頑張りたい。

○地形によって津波が変わるという話から、勤務校及び周辺の地形、さらには歴史を知っておくことの重要性を学んだ。複数の小学校跡地を訪問して、適切な避難行動を取ることができれば、多くの人がたすかり、少しの判断ミスをすれば多くの人が命を失うという事実を改めて思い知ることとなった。トップに立つ者の責任は重いが、トップ任せにしているのは助かる可能性が低くなることも事例から学んだ。誰かに任せるのではなく、地域住民も含めて一人一人が防災意識を高めていくことが大切だろう。



南三陸町防災庁舎跡（下の部分は見えない。周りはかさ上げされた地面）

○二泊三日の研修を通して、防災教育の在り方について新しい考えを得るよい機会となった。秋田県でも津波や豪雨等、様々な災害が起こりうる。

児童生徒の命を守るためには「本気の避難訓練」を常々しないといけない。学校で防災担当だった頃、「登校直後の避難訓練」や「防火扉を閉めての避難訓練」等をしたことがある。様々なシチュエーションの経験やマニュアルの整備には「想像力」が必要だった。この研修で得た「実体験」を「想像力」に加え、避難訓練やいざというときに生かしていきたい。

○今回の旅行は、東日本大震災から防災について学んだ三日間であった。被災した荒浜小学校、大川小学校、雄勝小学校の事例から私たちは子どもの安全のために何をしなければいけないかを考えさせられた。学校の危機管理に百点満点はないかもしれないが、様々なケースを想定し、安全第一の立場になって臨機応変に対応できる管理職になりたいと思う。この経験を現場の職員にも伝えるような研修を開きたいと考える。

○東日本大震災後に被災地を訪れたのは初めてであった。これまで報道でしかわからなかったが、仙台市荒浜、石巻、南三陸を訪問し、後者の跡地や現在の状況を直に見ることができたのは大変貴重な経験となった。津波被害の大きかった地区の学校の対応から学ぶこと、改めて考えるべきことに気づくことができた。物の豊かさではなく人とのつながりを感じたときに人は生きていけるという徳水さんの言葉が脳裏に焼き付いている。教育の核心はまさに人とのつながりに焦点を当てることなのではないかと考えさせられた。

○戸倉小の校長が赴任後すぐに避難の仕方を確認したり、地域の人たちの話を聞いたりして、当日は津波をすぐに確信しすぐに二次避難場所に避難させた話も心に強く残っている。危機管理は「やり過ぎて悪いことはない」と改めて思った。これからは赴任先で避難経路や避難場所の妥当性、備蓄庫の場所、防火シャッターの機能などを点検・確認することを優先して行おうと思う。どんなケースにも最善を尽くして予防することの重要性を学んだ。

学卒院生の感想

○実際に被災地へ行き、地形等の地理的情報を直接収集することが私たちの切実感につながったと感じる。特に今回は過去を振り返るだけでなく、現在どのような取り組みをしているのか、未来に向けてどのようなことを考えているのか等の情報も聞くことができてよかった。子どもたちに震災について教えていく際には様々な側面について触れていきたい。また、「地域を知る」「地域とのつながり」「垂直避難」等の重要な教えを中心に、もう一度私たちがしていかなければならないことについて整理する必要があると感じた。



えびたけ旅館

○今回の旅行ではたくさんの人と交流することができた。普段よりも現職院生の方々と交流する機会があった。また、宮城の教職大学院の方々とも交流できた。自分の視野を広げることができた。私は3月11日、新潟県にいたので被災はしなかった。津波の様子も映像でしか見たことがなかった。実際に被災地を見学したことで、どこか他人事だった防災を自分にも起こりうるものとしてとらえるようになった。常に何が起きてもいいようにし、対応できるようにしたい。

○今回、初めて被災地に行ってみて、3.11から6年が経つが、まだ場所によっては被災した跡が残っていることがわかり、復興が完全に進められているわけではないことを痛感した。しかし、雄勝

のローズファクトリーガーデンや南三陸町の商店街など、地元の良さを活かした復興に向けた取り組みがなされていることはとてもよいことであると感じた。秋田県も今年7月の大雨のように、いつ災害が起きてもおかしくない。いつ災害が起きても万全に対応できるように、日頃から危機管理についてはしっかりと考えるようにしたい。そして、仮に被災したとしても、雄勝や南三陸町のようには地域一丸となって復興に向かえるようにしたい。

○三日間と通し私が知っているようで何も知らなかったと分かった。どの小学校跡地でも本当ならばまだここで生きていたかもしれない、笑って勉強していたかもしれない子どもたちのことを考えると悲痛な気持ちになった。私たちが笑って暮らせているこの日常がどれほどかけがえのないものか、失ってから気づくのは遅いのだと分かった。津波が来たら町も家も失うかもしれない。それでも命、人とのつながりだけは失わないよう、防災の取り組みを進めていきたい。

○私は東日本大震災の被災地を訪れるのは初めてであり、今日訪れた場所の全てが初めてだった。今まで防災教育といっても漠然と考えていたにすぎないことを感じ、実際に被災地を訪れてみたことで、被害の大きさや人々の状況というものを目のあたりにし、より身近な物として考えていく必要を感じた。また、特に印象的だったのは、地域によつての違いや子どもに寄り添っていくことであり、それらの実態を把握することに努めながら、秋田の防災教育について考えていきたい。

○防災教育を浸透させていくにはまず大人たちの意識改革からしていかなければならないと思った。大人たちの「逃げない」姿を見て育った子どもたちは、自分が大人になったときに同じ行動をとってしまう。そうして誤った防災文化が定着してしまうことで多くの犠牲を生んでしまうという現状

を変えていかなければならないと思う。そのため
に教師、学校がそのような働きを果たせるよう、
どんなことができるのか考えていかなければなら
ないと感じた。具体的なこととしては、子どもた
ちに対してだけ防災教育を推進していくのではな
く、保護者の方々や地域の方々も一緒に巻き込ん
で実際に行動できる仕組みを作っていくような防
災訓練や講演会などの実施を目指したい。また、
正しい情報や知識をことある毎に発信していける
よう、配布物の作成などにも努めていきたい。地
域をひっくるめた防災を目指して、機会づくりを
していければと思う。

○防災教育を行う上で大切なことは三点あると思
う。一つ目は教員間の情報共有と認識の統一であ
る。学校周辺の地形についての知識を共有し、ど
の部分危険でどのように避難するかまで学校内
であらかじめ統一しておく必要がある。二つ目は
地域との連携である。普段から地域と連携して防
災訓練を行い、助け合える体制づくりをしておく
ことが大切だと思う。三つ目は危機意識を常に持
つことである。どこに危機が潜んでいるかを考え、
未然に防止するための方策を考えておくことが大
切だと感じた。

○二泊三日の旅行で様々な場所で学ぶことができ
た。私は震災の被災地に行ったことがなかったの
で、今回行って見て非常に衝撃を受けた。今は何
もない更地に震災以前は家がたくさん建っていて
たくさんの人が生活していたなんてとても想像が
つかない状態になっていた。自分がどれだけ他人
事に思っていたのかを感じ、反省した。教員とし
てすべきこととして、今回の見て聞いて学んだこ
とを就職したときの教育に活かしていきたいと思
う。そのための旅行なのでしっかりと学んだこと
を覚えておきたいと思った。三日間、様々な体験
ができて、非常に充実した経験ができた。

○実際に震災遺構を見たり、当時の様子を講話で
知ったりしてみると、被災した方の気持ちや教師
の当時の緊張感が感じられて、重い責任感が自分

の体にのしかかってくるような気がした。「二次避
難」というキーワードを初めて知った。二次避難
で助かった場合が多かったことから、油断せず、
「これで大丈夫」と思わず、最善を尽くして「垂直
避難」ができるよう、子どもたちと防災能力を高
めていきたいと思った。まずは秋田県の震災の歴
史をしっかり知ることから始めたいと思う。

○学部時代を宮城で過ごした自分にとって、どこ
か懐かしさを感じる機会がたくさんあった。秋田
大で学んだことを踏まえると新鮮な学びもあった。
正直な感想として、復興はまだまだ時間がかか
ると感じた。しかし、このように被災地を見学す
ることはこれからの教員生活にとっても活かすこと
である。自分事として考え、「もしもの時」に備え
ることは災害大国日本で生活する以上とても大切
なことだと考えた。生徒たちへの防災教育の充実
を図るだけでなく、自らの危機管理意識もより高
めていかなければならないと感じた。



えびたけ旅館

○昨年度と比べ、震災教育プログラムのような体
験的に学ぶ機会があり、危機管理に対する気持ち
を新たにした。旅行中何度か耳にしたように「助
からなかった事例から学ぶだけでなく、助かった
事例から多く学ぶことがある」と考える。被害を
受けた建物が震災遺構になったり、被災者が語り
部として活動したりなど、震災の記憶を伝えるた
めの動きができつつあると感じた。南三陸の様子
を見て、復興に向けて進んでいる一方で、今後ど

うなるのか気になった。被災地として人が集まるのではなく、住む場所となるにはどのように変化していくのかと考えた。

○被災地に初めて訪問し、自分の町や友人、家族を失っても前を向いて画期を取り戻そうとする姿に応援したくなった。防災教育、震災教育の考え方は学ぶべきことが多くあった。校長の判断のどうかが印象に残っているが、改めて組織的な学校体制、最善の対策を取ること、地域ぐるみで避難について共通認識し、自分の住んでいる地形を知るというような多くの新しいことを知ることができ、充実した旅行になった。

○今回初めて被災地を訪れてみて、やっと防災教育が他人事でなくなったように思う。学校でどのようにして子どもの命を守るかは日頃の備えが9割、現実になったときの判断が1割のような気が

する。一番印象に残ったのは「地域にあった防災」ということで、避難の仕方は地域それぞれであり、歴史も踏まえたものにしたいということだ。また、子どもは常に学校にいないわけではないので、地域住民や家族とも防災について学ぶ機会の設定も今後重要になるのではないかなと思う。



登米市教育資料館
旧登米高等尋常小学校

学校危機管理の授業での防災教育等プログラムの検討会

11月1日の学校危機管理の授業において、今回の石巻研修研究旅行の概要について発表（野坂奨）を行った後、防災教育等プログラムの検討会を実施した。

事前に、チーム毎に、

- ①防災教育・安全教育のプログラム・内容
- ②防災体制・安全体制の体制（学卒は訓練等、現職はマニュアル・分掌等）
- ③子ども・教職員の心のケア
- ④地域復興のための教育

から、重ならないようにテーマを選択し、各チームの現職院生は研修プログラム（指導案）を考え、学卒院生は授業プログラム（指導案）を考えるととした。プログラムは、授業の指導案の形式になったものとした。まず、各チーム内で各人が発表し、質疑、検討を合わせて20分ほど行う。

その後、各チームを解体し、できるだけ多様なテーマの人で構成されるグループ編成として、それぞれが発表、質疑、検討をさらに20分ほど行うこととした。これにより、全員が自分のチームのテーマを深めるだけでなく、他のテーマについても知ることができることとなる。

当日は、文部科学省教員養成企画室の柳澤室長が参観した。

この回の院生の感想を以下に挙げる。

<現職院生>

○様々な視点からの指導案と研修計画が参考になった。特に「生徒の安全は学校だけでは守れない」という考え方が刺激となった。今回は四つの視点からのプログラムだったが、いずれも教師の当事者意識が大切だと思った。

○四つのテーマによるプログラムの検討会を通し、防災学習がより一層身近で必須のもののように感じた。熊対策などユニークなものもあったが、常に想定内の想定外を意識して研修に取り組み、防災意識を高めていく必要がある。

○ワールドカフェ方式で異なる視点から防災教育を考えることができたことは有意義であった。全く考えつかなかった指摘もあり、複数の目で物事を見ることの重要性を改めて認識することができた。災害は発生後の対応に加え、日常の取り組みも大切なことも学んだ。

○キーワードは共通理解だと感じた。それが全教職員であつたり全校生徒であつたり、地域住民とともにであつたりするが、みんなで考えられるプログラムを管理職の立場になったら実施していきたい。

○危機管理の研修会、授業といってもたくさんの視点があり、学校の現状に合わせてどこにポイントを置くのかを考えることも必要だと思った。また保護者や地域をうまく巻き込む工夫が重要だと思った。

○ストマスの作成した各教科の授業案は工夫があり、面白かった。中学・高校で大事なものは各教科で取り組んでいることをまとめる横の連携。例えば理科（津波）、道徳（震



災)、社会(地形)で取り組んだことを活かした避難訓練など。

○グループ協議では前半で安全体制づくりについて、後半で防災教育、子どもの心のケア、地域復興のための教育について視野を広げることができた。子どもへの指導の充実とともに、職員研修も充実していく必要があると実感した。

○自己テーマを被災時の避難所開設・運営のための学校が求められる対応を考えるプログラムを考案した。これまで現場では全く考えたことのない内容だったが、想定しておく必要性を実感した。すでに秋田市では指針が策定されていることを知り、他人事ではないことに気づかされた。

○実際の場面を想定して研修プログラムを考えるのは難しかったが、作っていく中で課題について自分の考えが深まっていくのを感じた。石巻に行かなければできなかった課題であり、学んだことを実践に落とし込むプロセスを経験できてよかった。

<学卒院生>

○地域や保護者と一緒になって行うことと、学校の中でどんな体制にしておくかということの二つが大切だと思った。今回考えたことを実際にやってみないと意味がないと思うので実現可能な案であることも大事で、自分で現場でできることに直したい。

○防災教育の指導案、授業について考えるのは新鮮であり、同時に難しさも感じたが、検討を通して様々な意見をいただいたり、アイデアを見聞きして参考になった。学校の地域や実態に合わせて危機管理について考えていけるように実践を考えていきたい。

○心のケアに関するものや、訓練プログラムなど、普段考える機会が薄い私にとって新鮮なことをたくさん知ることができた。学校の防災、危機管理と、子どもや自分たちの安全のためにも、今後もより勉強していく必要があると感じた。

○一言で研修といっても、どういった切り口のものを行うかによって、全く内容も違ったものになることが分かった。ただ、どれも必要なものだと感じたので、本時の活動を改めて見直して、聞いた発表の意図についてそれぞれ考える必要があると思った。

○PTAの後に保護者の方とともに避難訓練をするという考えを今日初めて学ぶことができた。確かに学校だけではなく、地域住民とともに避難する「共助」の考えも大切である。また、今日の検討会でたくさん指摘されたので、修正してより活用できるプログラムを作りたい。

○心のケアというテーマで指導案を作成したが、作る時に感じたことは生徒一人一人によって心の状態が違うのでとても難しいということである。生徒によっては響かないかもしれないと思った。

○四つの視点のテーマから、様々な立場の提案を聞くことができ、アイデアを参考にしたいと思った。すぐ現場に出たときに実践してみたいプログラムばかりだったので、一つ一つ練り合っていたらもっといいだろうと思った。

○校種毎に重視するポイントがあるように思う。命を守ると聞いたとき、最も起こりうるパターンが発達段階で違うのも理由の一つだろう。ただ、「想定外」を想定しておく、ということだけは共通であったと思った。

○防災・安全教育という視点に立つと、地域や家庭との連携は重要だと多くの人が言われるが、ではそのためにどういう動きをしていく必要があるのかという深いところまで考えなければならないと感じた。PTA総会や授業参観など、他にどういった機会を作っていけるのか考えて実行していくようにしていきたいと思う。

以下に、提案されたプログラムを掲載する。

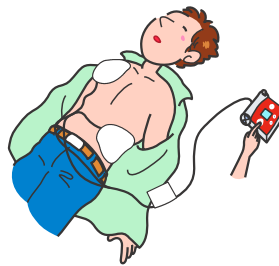
自校における安全教育研修実施計画

- 1 研修場所 仙北市立桧木内小学校
- 2 研修参加者 桧木内小学校全職員
- 3 研修時間 60分程度
- 4 研修テーマ

学校事故発生時における適切な対応の仕方

- 5 研修のねらい
 - ・学校事故発生時の組織的な対応について、役割分担を決めて演習をすることで適切に対応するにはどうしたらよいかを理解する。
 - ・教職員の危機管理意識の向上を図るとともに、教職員同士の連携の意識を高める。

- 6 準備
 - ・人数：1グループ6名（A，Bグループ）
 - ・役割札：校長・教頭・学級担任・教諭A・教諭B・養教
 - ・心肺蘇生訓練用人形
 - ・AED
 - ・事故対応記録用紙
 - ・演習評価シート
 - ・付箋紙，ペン
 - ・時系列対応表



7 研修の流れ

時間	研修内容	留意点
5分	1 研修テーマとねらいを確認する。	・ 自校でも起こりうる事故を想定することを伝え、どのような対応をとることがよいのかを考えさせる。
2分	2 事故事例の提示をする。	
	<事例> 給食後の昼休み、体育館で小学校5年生の男子児童がドッジボールをしていた。至近距離から友だちの投げたボールが男児Aの胸部に強く当たり、男児Aは意識を失い床に倒れ込んだ。周りにいた児童が職員室に知らせに来た。	
10分	3 グループ内で「役割分担」「動き方の確認」をする。	・ 6人を校長、教頭、学担、教諭A、教諭B、養教役に振り分ける。 ・ グループでの話し合いで、各自の動きを付箋紙に書き込み時系列対応表に貼り付けながら確かめる。
5分	4 Aグループが事故事例への対応について演習をする。 <演習1> ・ Aグループが心肺蘇生訓練用人形を使いながら救急車到着までを演習する。 (5分程度) ○責任者(校長)	・ 演習後の協議に生かすために、それぞれの役割において大きな声で対応するよう指示する。 ・ Bグループは、自分と同じ役割をする教員の動きや指示を事故対応記録用紙にメモする。また、よい点と課題を時系列で記録するようにする。

	○陣頭指揮（教頭） ○救急処置（養教） ○家庭への連絡（学担） ○救急車の要請（教諭A） ○児童の管理・対応・状況確認（教諭B）	
15分	5 演習1について協議をする。 ○演習を行ってみての課題は何か。 ○役割分担はスムーズか。 ○救急処置対応はどうであったか。 ○事故現場と本部の連絡はうまくできていたか。	・それぞれの役割から意見を出し合い、よい点と改善点をまとめる。 ・全体で情報を共有し、よりよい方法を考える。
5分	6 Bグループが事件事例への対応について演習をする。 <演習2> ・Bグループが心肺蘇生訓練用人形を使いながら救急車到着までを演習する。（5分程度）	・演習1の協議を生かしながら事故対応の演習を行う。 ・Aグループは、自分と同じ役割をする教員の動きや指示を事故対応記録用紙にメモする。また、よい点と課題を時系列で記録するようにする。
10分	7 演習2について協議をする。	・協議が生かされていた事故対応であったかを確認する。 ・更なる改善点を出し合う。
5分	8 振り返りをする。	・適切な対応ができたか、新たな気づきは何か、課題は何かなどを演習評価シートに記入する。
3分	9 校長から	

7 研修のチェックポイント

- ・救急車を要請した場合、救急車の誘導係を決めているか。
- ・事故現場と職員室の連絡は距離が離れているが、連絡方法を意識して行動しているか。
- ・必要な役割や対応を全職員理解しているか。
- ・演習を通して自校の具体的な課題に気づくことができたか。
- ・実際に対応することの難しさを実感し、常に危機管理意識を持つことが全職員の課題ととらえているか。
- ・「どこ」を「どう」改善するべきかが具体的に協議できたか。

8 その他

- ・この研修の前に、AEDによる1次救命や心肺蘇生訓練用人形を使った心臓マッサージの講習を外部講師に依頼し実施しておく。
- ・実際の学校では、校長が出張等で不在のことが多い。校長不在時の対応についてもシュミレーションをし、必要な役割を決めて対応できるかが大切である。
- ・研修を受けて自校の危機管理マニュアルの改善点が見つかった時には、すぐにマニュアルを見直し、自校の状況に合った形に変えておく必要がある。
- ・危機管理のチェックリストも日頃から活用し、全教員で共通理解する。
- ・救急車の呼び方（例）や保護者に連絡する際の確認マニュアルを電話横に置き、落ち着いて対応できるようにする。

※岡山県総合教育センター冊子『「いざ」というときあなたは』参照

【学校マネジメントコース（現職）小松文彦】

学校における防災研修会 実施計画

1 研修会場所

- ・秋田県立ゆり支援学校（由利本荘市水林に立地する特別支援学校）

2 場所の特徴

- ・海拔20M以上の高台にあり、「福祉エリア」と称される場所にある。障害者福祉施設や老人ホーム、病院がある。さらに上に上がると陸上競技場がある。（海拔30M以上になる）高齢者と障害者が多い地域である。



（Google より引用）

3 研修テーマ

「大地震や大津波が起きた場合の福祉エリアで教員・児童生徒ができることは何か」
～福祉エリアに孤立した場合を想定して～

4 対象、研修時間

- ・ゆり支援学校職員（50人程度） 50分程度の研修
※1グループ6～7人程度、7グループ

5 研修のねらい

- ・大地震や大津波が起きたときに、福祉エリアで教員・児童生徒が地域のためにできることは何かを探る。
- ・大きな災害が起きた際のシミュレーションをすることで、想定外を想定内にする心構えを作る。
- ・この研修を通して、児童生徒の防災教育の内容の充実につなげる。

時間	研修内容	進行上の留意点
3分	1 研修の趣旨を説明する。	・万が一の場合を想定することで、自らの想像力を働かせ、避難訓練に生かす。 ・最初から「無理」とか「ありえない」と考えず、できるだけプラスの観点を中心に考える。その中で課題になりうることを見出す。
5分	2 グループに分かれて、できることを考える。 ☆ワークショップ方式で付箋紙にコメントを記入する。	
5分	3 個人で考える時間を設ける。 （一人5枚程度） ・人的要因（青） ・環境要因（黄） ・その他（緑） ・教育活動でできること（赤） ・課題（ピンク）等	・期待したいコメント ◎災害が起きた時に行うべきことは？ ・児童生徒・教員等の安全確保 ・高台へのさらなる避難 ・学校に戻った際の健康の維持 ・非常食の確保 ◎助け合えることは何か？ ・移動の手伝い ・毛布や非常食等の学校備品の提供 ・安全が確保された後に各施設との情報共有 ・近隣住民の方が避難してきた場合の対応は？ ◎教育活動でできることは何か？ ・交流及び共同学習のさらなる充実による関係作り ・合同避難訓練の実施（まずは障害者福祉施設のみ等） ・児童生徒の防災教育の充実
20分	4 一人一人、自分の考えを模造紙に張る。 ・同じ意見や似た意見は同時に張っていく。	

		・教育課程への位置づけ ・各機関の連携・協力の在り方の協議の開催
5分	5	カテゴリー分けをする。
5分	6	グループごとに発表する。
5分	7	防災担当からのまとめ。 (管理職等)
		・教育課程への位置づけ ・各機関の連携・協力の在り方の協議の開催 ◎課題や困難なこと ・自分たちの命・安全を守るのが一番 ・そのような心の余裕があるか？ ・保護者への引き渡し、連絡の仕方 ・そもそも助け合いは必要か？ ・近隣住民が避難してきた際の対応が不透明 ・教職員の役割分担が煩雑にならないか？ ・似た意見をまとめたところから「キーワード」を考える。 ・グループのチーフが「できそうなこと」「課題になりうること」等を簡潔に発表する。 ・各グループから出された意見を元に今後の研修や避難訓練計画を考えていくことを伝える。

6 その他

◎準備物・模造紙・付箋紙・各種マジック

7 この研修で期待したいこと

- ・避難訓練のみではなく、広く防災教育を教育課程に位置付けるには、職員の意識に問いかける必要があるのではないかと考える。その土台作りとしてこの研修を提案した。ここから生徒たちへの防災に対する意識を高めるための教育活動はどうあればよいかを学校全体で考えていく流れになることを期待したい。軽度の知的障害の生徒に限られるが、同じような内容で防災教育の時間を設定できるのではないかと考えられる。
- ・自分たちが学んでいる場所の地形や安全な場所等を、自分たちで確かめるといった実際の活動も取り入れることで防災教育の充実につながると考える。
- ・災害におけるシミュレーションを行うことで、教員の想像力を養う。防災担当だけが考えるのではなく職員の「当事者意識」を高めることができるのではないか。
- ・周辺地域との連携をすることで「防災教育の在り方の検討・充実」や「社会に開かれた教育課程」の実践につなげることができるのではないか。
- ・この研修で出た声を生かし、防災担当や管理職でのマニュアルの見直しや避難訓練の実際の改善につながっていくのではないか。

8 この研修の課題と学習活動への展望

- ・現実的に考えると、高齢者と障害がある児童生徒が多い地域で、どれだけゆり支援学校の生徒たちが役に立てるかは正直分らない。災害の状況による心理状態等、課題はたくさんある。しかし軽度の知的障害の生徒たちならば、自分たちの安全を確保した後にやれることはあると考える。
- ・防災教育のみで考えるのではなく、普段から地域との関係作りをしておくことが大事になってくる。引き続き、交流及び共同学習の推進や行事への積極的な参加をしていくような取り組みを継続していくことが重要ではないかと考える。また避難訓練にとどまらず、知的障害のある児童生徒の場合は体験を交えないと理解につながらない場合がある。軽度の知的障害の高等部生徒が中心になるだろうが、体験的な防災教育の充実が必要だと考える。また地域住民の方の避難も考えられるので、そのシミュレーションも生徒たちと一緒に考えることで防災教育に厚みをもたせることができるのではないか。

【発達教育・特別支援教育コース（現職）黒木良介】

安全教育プログラム案

1. 研修場所 A 高等学校

2. 場所の特徴

A 高等学校の所在地である K 市は、県の北部中央に位置し、ブナの原生林や多数の瀑布が散在し、優れた自然景観や山岳溪流に恵まれている。この豊かな自然環境は経済効果等をもたらす貴重な財産である。環境問題が深刻化する現在、自然との共生が重要な課題となることから、自然環境を活かしたまちづくりを推進している。また、この地域は、近年熊等、野生動物の出没・遭遇、人的・物的被害が多数報告されており、児童生徒の安全確保及び被害防止に向けた教育の実施は喫緊の課題である。

3. 研修テーマ 安全教育の視点からの「クマ等、野生動物との共生」

4. 対象 K 市内の小・中・高・特別支援校の教頭（もしくは研究主任）

5. 研修のねらい

「人間と熊等、野生動物が共生できる社会」の実現に向け、安全教育の視点から、各校種での指導の在り方を検討する。

- ① K 市におけるクマ等、野生動物の生態・分布の理解
- ② 学校周辺・生徒の居住地域・通学路の危険性の把握と対策の検討
- ③ 他校（種）の実践事例を参考に、自校種の指導の在り方を検討

6. 研修内容（60 分間）

研修形態	時間（分）	主な研修内容
①講義 （課題共有）	20 分	・ K 市におけるクマ等、野生動物の生態・分布の理解 ・ 学校周辺・生徒の居住地域・通学路における危険性の把握
②講義 （事例紹介）	10 分	・ 小・中学校における指導事例の紹介 （H29.6.27 M新聞 A 市立 S 中・I 小） ・ 高等学校における指導事例の紹介（A 高校 R 科）
③協議・演習	30 分	・ 校種ごとのグループに分かれて授業案を作成する。 ・ 全体で共有（各グループから作成した授業案の説明・報告）

7. この研修で期待したいこと

- ①「安全教育」を主たる目的とする研修であるため、第一に熊等、野生動物の出没・遭遇の現状を把握し、被害防止の観点から、児童生徒が「身につけなければならない知識・技能」を具体化し、その習得に向けて効果的な指導案を各校種で検討すること。

- ②単に「被害防止」という側面だけを強調するのではなく、「人と熊等、野生動物が共存する社会を構築すること」を念頭に置き、熊等、野生動物の生態・分布に関する正確な理解を得ること。
- ③「『真の安全』は『正確な知識・理解』からもたらされる」「児童生徒の安全は、学校（教員）だけでは守れない（地域との連携が不可欠）」という認識を研修参加者にもってもらい、自校での普及・定着を図ること。

8. この研修の課題

- ・「安全教育」のほか、「環境教育」「野生動物の生態の理解」等の側面ももったテーマだけに、アプローチの方向を誤ると、目的が不明瞭になる危険性があること。
- ・外部講師として、地域人材や専門機関の活用が望まれること（予算等の裏付け必要）

9. 参考資料

- ・秋田県生活環境部自然保護課「クマに注意！！」リーフレット
- ・島根県教育委員会「学校危機管理の手引（改訂版）」H25.8
- ・「人里に出没するクマ対策の普及啓発および地域支援事業」（日本クマネットワーク事務局HPより）

【カリキュラム・授業開発コース（現職）柴田創一郎】

「安全な学校づくり」校内研修会 実施要項

1 研修名 本校の安全体制の課題と改善策～安全な学校づくりを目指して

2 研修の実際（本時 1 / 1 90分）

(1) ねらい

- ・安全な学校づくりに進んで参画しようとしている。
- ・未然防止を重視する「事前の危機管理」と、緊急時の初動や初期対応、中・長期対応など「事後の危機管理」の両方の重要性を理解した上で、本校の安全体制の現状と課題を把握し、その改善策について考えることができる。

(2) 研修の過程

時間	活 動 の 内 容	支援・留意点 評価（方法）
2分	1 教頭の挨拶（研修の意義について）	・ねらいの一つ目に触れるよう依頼しておく。
20分	2 資料ア「仮想事例：地震発生における火災による事故で生徒が死傷したケース」を読み、問題点と望ましい対応を考える。 ① 問題点を付箋紙に書く。（個） ② 模造紙に付箋紙を貼りながら話し合い、問題点を整理する。（グループ） ③ 問題点に対して、どのような対応が必要だったのかまとめる。（グループ） ④ 各グループの模造紙を見合い、「未然防止の取組」と「事故発生時の対応」についてポイントを確認する。（全体）	・資料アは事前に配付し研修前に読んでおけるようにしておく。 ・各グループの様子を見ながら必要に応じて視点について助言する。（計画的・日常的な安全点検や安全管理、生徒への安全指導、事故発生時の対応等） ・事前の危機管理と事後の危機管理、両方が大切であることを確認する。
3分	3 研修のめあてを確認する。 本校の安全体制を点検し、課題に対する改善策を考えよう。	
10分	4 資料イ「リスクマネジメント体制チェックシート」を使って、本校の安全体制の現状を考える。（個）	・「分からない」項目があることを取り上げ、職員間で安全体制への関心にばらつきがあることを話題にする。
10分	5 学校保健安全法に基づく「学校安全計画」及び「学校危機管理マニュアル」の作成の必要性とその見直し・改善の重要性を知る。	・法的根拠を示すことで、職員全体で取り組むことの意義を伝える。

30分	6 本校既存の「学校安全計画」と「学校危機管理マニュアル」について、不完全な点（課題）を挙げ、その改善策を考える。 ① ホワイトボードに書き込みながら話し合い、課題を整理する。（グループ） ② 課題に対して、どのような改善策が考えられるか話し合う。（グループ） ③ 各グループからの発表により、意見を共有する。（全体）	- 各グループで課題を明確にして話し合えるよう、必要に応じてグループ協議に参加する。 - 本校の安全体制の課題を考え、よりよい改善策を提案することができる。 - グループ協議に積極的に取り組んでいる。（観察・ホワイトボード）
8分	7 改善策として有効なものを確認し、既存のものをどう変えるか確認する。（全体）	実効性のあるものをピックアップする。
5分	8 本研修を振り返る。（個→全体）	ワークシートを使用する。
2分	9 校長の挨拶（研修の成果について）	問題が起きてから対応するのではなく、問題が起きにくい学校風土をつくることの大切さを言い添えるよう依頼しておく。

3 資料について

資料ア 「仮想事例：地震発生における火災による事故で生徒が死傷したケース」 あらすじ
・南海トラフ沿いの熊野灘沖を震源とするM7.5の地震が発生、三重県下でも震度5弱～6弱の激しい揺れ。

- ・いが中学校1年B組が理科室でろうそくを使った観察実験を行っていた。
- ・激しい揺れにより、理科室後方出入り口付近に散乱した教科書やノートにろうそくが落ち、炎に。2度目の激しい揺れで火は壁に燃え移った。
- ・生徒たちは避難開始。途中、2階階段踊り場の防火シャッターが下降し始め、生徒たちが防火シャッターの下をくぐり抜けようと殺到。
- ・他の階から避難してきた生徒たちとともに群衆雪崩が発生。大腿骨骨折1名、肋骨骨折2名、手首骨折3名の他、ねんざ・打撲等数十名。一酸化中毒4名のうち2名は意識不明の重体が続いている。そして大勢の生徒の下敷きになった女子生徒は意識不明で搬送後、内臓破裂のため死亡。

資料イ 「リスクマネジメント体制チェックシート」について

- ・中央研修の際に配付されたチェックシート。大項目「地震防災」については体制整備、マニュアル整備、整備・点検、情報共有、初動、情報伝達、二次避難、避難所設置、訓練の中項目があり、それぞれに小項目チェック事項が複数個ある。この他に大項目「いじめ」があり、中項目には組織風土、教育啓発、体制、早期発見・早期対応がある。
- ・チェックの際は、本研修の内容からはそれるが大項目「いじめ」についてもチェックしたい。

【学校マネジメントコース（現職）近藤明子】

校内防災研修「緊急時対応訓練」実施計画

特別支援学校には医療的ケアを受けていたり、車いすを使用していたりする児童生徒等が在籍している。それゆえヒヤリハットの事例も起こりやすく、緊急時対応の体制作りが必須である。しかし、マニュアル等があったり訓練自体は行ったりしているものの、職員のとっさの場合の判断力を高めていくためには、様々な状況の中での訓練や意識付けの機会を工夫して実施していくことが必要である。今回は授業中に医療的ケアを受けている生徒が痰によって気管がつまって呼吸困難になり救急車を要請するケースを設定した。なお、AEDの研修は前回の研修で扱ったものとする。

1 ねらい

- ・緊急事態を想定した対応を検討したり、実際の訓練を行うことを通して、とっさの場合の判断力や組織としての対応力、危機管理意識を高める。
- ・チェックリストを使った見直しを行うことでマニュアルに基づいた行動の重要性を理解する。

2 所要時間、実施時期、実施形態

所用時間 90 分、夏季休業中に実施、心肺蘇生と緊急時対応のシュミレーション

3 準備

人数：1 グループ 10 人の 4 グループで 40 人想定

準備：付箋紙、マジック、時系列表、緊急時対応チェックリスト、救急車要請の手順、AED、記録用紙、評価用紙

時間	活 動	留意点	備考
5 分	1 研修についての説明を聞く。 (1) 本研修のねらいと流れ (2) 緊急時対応事案の理解 ・医療的ケアを受けている生徒 A が、教室で授業中痰が絡み、苦しそうにしていたため看護師に吸引を依頼する。しかし状態が改善せず、呼吸困難に陥ってきたため、職員で心肺蘇生を行い、救急隊員が駆けつけるまでの対応を行うという設定	・グループ（ABCD4 グループ）に分かれて、緊急時対応を想定したフローチャート作りを協力して行い、その後チェックリスト等により見直しをすることと、それを元に想定訓練を行うことを伝える。	
15 分	2 グループ別演習 I (1) 事例の対応策について話し合ってみる。 ①事例に対してどういった役割・対応が必要かを考え、「誰が」「どんな役割をするか」「どう行動するのか」について話し合う。	・各グループで行う。	付箋紙 時系列表

	②必要な役割を考え、対応を時系列表に付箋を使ってフローチャートで書いていく。 ③具体的な動きについて示し、矢印で連携を表していく。	・対応のポイントについては見直しの際に示す。 <u>安全確保、保護者への連絡、応援要請、応援職員への指示、他の児童生徒の掌握、心肺蘇生、救急車の要請等</u> ・チェックリストと比較し、見落とされがちな点や重要なポイントを見直す。	チェックリスト
3 5	3 グループ別演習Ⅱ ○2つのグループ毎に対応訓練を行う。 (10) ①役割分担をし、手順を確認する。 (5) ②訓練をする。(A グループが行う時は B がオブザーバー) (10) ③振り返りをする。 ・役割分担や連携、指示について気づいたことやオブザーバーの意見交換 (5) ④グループを交代して訓練をする。 (10) ⑤振り返りをする。	○役割 10 人（講師はタイムキーパーをする） 生徒①（心肺蘇生練習用人形） 生徒②（他の生徒） 指導者（担任）、養護教諭、看護師、教頭、校長、他の教師（ア、イ、ウ） ・救急隊員が到着するまでの設定 ・チェックリストや救急車要請の手順、記録用紙を渡す。 ・A と B、C と D はそれぞれ組になり、互いに状況を見合い事後に意見を伝える。	手順表 記録用紙 AED 心肺蘇生用人形
1 5	4 協議 (1) グループ別協議をする。 ○緊急時対応チェックリストを見直し、改善すべき点や重要な点について確認する。 ○緊急時対応訓練について気づいたこと (2) 全体で協議をする。 ・各グループの発表で共有する。	・特に意識を払うべき点についてポイントとしてカードにまとめて全体共有で使用させる。	カード
5	5 講評	・一人一人が当事者意識を持つこと、リーダーをもとに連携をとりあうことの重要性を確認する。	
5	6 振り返りを記入		評価用紙

※岡山県総合教育センター「いざというときあなたは」

平成 20・21 年度岡山県総合教育センター共同研究「危機管理意識を高める研修方法に関する研究」を参考。

【学校マネジメントコース（現職）泉 拓行】

安全体制に関する校内研修会 実施計画

1 ねらい

- (1) 危機発生時に組織的な対応をすることの重要性についてシミュレーションを通して知り、的確に対応するためにはどうしたらよいかを理解する。
- (2) 教職員の危機管理意識の向上を図るとともに、教職員同士の連携の大切さを意識づける。

2 所要時間・研修形態・実施時期

90 分・シミュレーション研修・夏季休業中

3 準備

人数：1 グループ 8 人程度で編成 4 グループ

準備：役割札（副校長・教頭・主幹教諭・教諭 A B・担任・養護教諭・児童）

場所表示札，観察者メモ（付箋紙），演習評価シート

4 研修の実際

時間	活 動	備 考
10 分	1 自校で起こりそうな課題設定の把握 『給食後の昼休み，グラウンドで小学校 5 年生の男子がサッカーをしていた。至近距離から友達の蹴ったボールが男児 A の胸に強く当たり，意識を失い倒れ込んだ。周りにいた児童が職員室に知らせに来た。（教職員が駆け付けると男児 A は心配停止であった。）』	〈役割分担〉 ・児童 A (床に倒れた児童：心肺蘇生練習用人形) ・児童 B (職員室の教師に知らせに行く) ・児童 C D E (周りの児童でパニック状態いると仮定して実施) ・職員室 (副校長・教頭・主幹教諭・教諭数名) ・保健室 (養護教諭) ・5 年教室 (倒れた児童の担任)
15 分	2 演習 1 ① 児童 B が職員室に知らせに来る。 ② その場にいた教職員が対応の開始 ・必要な役割・対応の決定・本部の設置	・進行・時間管理は主幹教諭 (校内放送で連絡) ・各グループで，どの役割を観察するのか決め，該当の場所

	・養護教諭への連絡 ・事故児童の担任への連絡 ・事故現場での対応 ・救急車の要請 ・事故児童保護者への連絡 等 ③ 5分程度で終了する。 ※観察しているグループは、対応のよい点（赤）、課題（青）を付箋紙に分けて記録する。	へ移動する。
20 分	3 演習 1 の協議 ① それぞれの役割から意見を出し合い、改善に生かす。 （協議例） ・演習を行って初めての課題は何か ・役割分担がスムーズにできたか ・それぞれの役割で、お互いの連絡がとれたか ・救急処置対応はうまくできたか ・事故現場と本部の連絡はうまくできたか ② 全体で情報を共有し、よりよい方法を考え、演習 2 で実践する。	〈会場〉 ・ホール
10 分	4 演習 2 演習 1 と異なるグループが実施する。 ※観察しているグループは、対応のよい点（赤）、課題（青）を付箋紙に分けて記録する。	・進行・時間管理は主幹教諭（校内放送で連絡） ・演習 2 で観察した役割を再度担当し、観察する。
15 分	5 演習 2 の協議 ① それぞれの役割から意見を出し合い、改善に生かす。 ② 全体で情報を共有する。	〈会場〉 ・ホール
20 分	6 自校の危機管理マニュアルのどこをどう改善するのか協議する。 ① グループ協議 ② 全体協議	

※岡山県総合教育センター冊子『「いざ」というとき、あなたは』（H21）

新潟県立教育センター『安全な学校づくりを目指す危機管理講座【資料編】』（H28）

を参考にしております。

【カリキュラム・授業開発コース（現職）鈴木 聡】

心のケア校内研修会 実施案

1 研修会名 心のケア実践研修会

2 研修会の目的

- ・「心のケア」に関する基本的な考え方について、共通理解を図る。
- ・「危機発生後」を中心に、「心のケア」に関する対応の仕方について意見交換すること、実践力の向上を目指す。

3 研修の実際

(1) ねらい

- ・危機発生後のケーススタディをとおして、「心のケア」に関する対応力を向上させる。

(2) 研修会の流れ

時間	研 修 の 内 容	講師としての支援
10	1 心のケアの基本的な考え方 ・講師が基本的な考え方について説明する。 → 資料1・2を基に	○演習の時間を確保するため、心のケアを行うことの意義について、概論的に扱う。
30	2 危機発生時の健康観察の様式づくり ① 養護教諭が健康観察の有意性について説明する。 ② グループごとに、危機発生時の健康観察の様式について検討し、作成する。 ③ グループごとに、作成した様式を紹介し合い、留意した点を報告する。	○実習のスムーズな進行のため、「通常時の健康観察の様式」「ストレスによって引き起こされる身体症状の例」を補助資料として準備する。
10	3 心のケアに関する危機管理マニュアルの内容確認 ・教頭が、心のケアに関する危機管理マニュアルを基に、学校としての対応方針と計画を確認する。	○流れを想起しやすくするために、具体的な場面を設定して確認を行う。
40	4 事例を基にしたケーススタディ ① 災害直後の事例について検討する。 ② 災害から1年経過後の事例について検討する。 → 資料3を活用 ③ ①・②への対応の仕方について、考えたことを各グループから報告する。 5 振り返りと報告 ・研修をとおした学びを各自が記録し、数名が報告する。	○自由に発想できるようにするため、資料3の、「対応」の部分をカットしたものを作成する。

【参考資料】

資料1 「子どもの心のケアのために～災害や事件・事故災害発生時を中心に～」

(H22. 7 文部科学省)

資料2 「学校における子どもの心のケア～サインを見逃さないために～」

(H26. 3 文部科学省)

資料3 「災害を受けた子どもたちの心の理解とケア 研修資料」

(H23. 3 兵庫県教育委員会)

1 心のケアの基本的な考え方

- ・強い恐怖や衝撃を受けた場合、だれにでもストレス症状が現れる可能性があること。
- ・場合によっては長引き、成長や発達の障害となる場合もあること。
- ・早期発見に努め、適切な対応を行う必要があること。
- ・ときには危機発生直後だけでなく、数年単位で影響を及ぼす場合もあり、長期的な支援が必要な場合もあること。

2 健康観察について

- ・子どもの変化に気付くために、日常の様子を健康観察で看取る。
- ・変化にいち早く気付くために、保護者との情報交換を密に行う。
- ・可能な限り個々の健康記録簿を作成しておく。
- ・危険発生時に現れやすい子どもの心身の反応についてまとめておく。

3 心のケアに関する危機管理マニュアル

- ・危機発生時の対応が適切に行えるように、危機管理マニュアルに心のケアを位置づけ、訓練やシミュレーションを行っておく必要がある。

4 ケーススタディについて

事例1 平成7年の阪神・淡路大震災の際、児童の住んでいた家は全壊し、児童は家具の下敷きになった。児童は震災直後から近くの親戚の家で暮らしていた。担任が訪問した際、母親から「壊れていない親戚の家に居ても、恐怖心はぬぐえていない。余震のたびに部屋の隅にうずくまり、最近では現実には見えないものが現れると言うようになった」と聞いた。しかし、震災直後、安否確認に奔走しているときは、心のケアにまで気も手も回らなかった。学校は数日後に再開された。しかし、学校は未だ避難所として使われており、崩壊のため使用できない場所もあった。このため、近くの幼稚園などのいくつかの施設を借りて授業を行っていた。児童は、もともと不登校傾向にあり、担任が迎えに行くことで何とか登校することができていた。しかし、教室にいて余震があると、突然、悲鳴をあげたり、壁や天井にひびが入っていると言いついたりして、授業が中断されることも度々あった。また、相談室や理科室など、少し狭い部屋や暗い部屋ではとても怖がる様子もあった。

事例2 児童は就学前に震災の被害を受け、自宅が全壊し、他の地域に家を借りていた。自宅再建のため、避難先の小学校に入学して1学期間そこに通学した。1年生の2学期、再建した自宅に戻り地域の学校に転校した。5年生になった9月に自然学校が行われた。それは多くの児童にとっては、初めて親元を離れて宿泊する行事であった。自然学校から帰ってきて数日後、保護者から「家庭でトルコ地震の映像を見ていたら様子が急変した」と連絡があった。その後、同じような状態がたびたびおこるようになった。サ行を「ちゃ、ち、ちゅ」と発音する幼児語になり、歩き方もよちよち歩きのような歩き方になる。本人に年齢を尋ねると「3歳」と答える。言動も行動も、周りが見ても本人が言う3歳児のようであった。はじめは3歳の状態になったり11歳の状態に戻ったりしていたが、症状は進行し、いつも3歳状態で生活するようになり、母親に付き添われて登校していた。学校でも、発音が不明瞭であったり、授業中等に周りの状況に関係なくはしゃいだり歌を歌ったりし、表情も3歳児くらいの幼さを見せていた。このように行動に変容が現れるまでは、児童は、とても責任感が強く、係の仕事など、嫌がることなく引き受ける子であったため、クラスの友達や教師からも信頼を得ていた。また、人に責任を振ったり、責めたりすることをせず、何かあると「自分の行動、考え方が悪いから」と考えがちな面もあった。

【学校マネジメントコース（現職）石塚昭仁】

A 高等学校 校内研修指導案

1 単元名 危機発生時の子ども・教職員の心のケア

2 単元の目標

- ・危機発生時に子どもに現れやすい心身の反応に関する基礎的な知識を身に付ける。
- ・学校が子どもの心のケアのために担う役割について理解を深める。
- ・教職員のメンタルヘルスの重要性を理解し、留意点について考える。

3 本時の実際（本時 1/2）

(1) ねらい

- ・危機発生時のメンタルヘルスに関する基礎的な知識を身に付け、子どもの心のケアのために学校が担う役割について理解を深める。

(2) 学習過程

時間	学 習 活 動	講師の支援 評価（方法）
3分	1 本研修のねらいを確認する。	
	危機発生時のメンタルヘルスに関する基礎的な知識を身に付け、子どもの心のケアのために学校が担う役割について理解を深める。	
22分	2 災害発生時に子どもに現れやすい心身の反応について理解する。 ① 知っている反応を各自でワークシートに書き出す。 ② グループ内で情報を共有する。 ③ トラウマ（心的外傷）、A S D（急性ストレス障害）、P T S D（心的外傷後ストレス障害）について、具体的事例を通してそれぞれの特性を理解する。 ④ 心身の反応の特性から、中長期的な子どもの観察が重要であることを理解する。	・学問的名称が不明な場合、症状をできるだけ具体的に書き出すよう助言する。 ・世代によって現れやすい症状が異なることに注意させる。 ・校種間の引き継ぎの重要性に気付かせる。
20分	3 心のケアの実践例を通して本校での取組について考える。 ① 石巻市立雄勝小学校の実践について	

	概要と特徴を理解する。 ② 本校でも同様の取組が有効かどうかグループ内で討論する。	・地域や校種によって有効な取組が異なる可能性に気付かせる。
25分	4 別紙資料「子供の話の聞き方」「子どもとの面接」を参考にしながら、ロールプレイを行う。 ① 2人1組となり、被災した生徒役と学級担任役を交互に務め、模擬面談を行う。 ② 2人で感想を述べ合う。 ③ グループ内で意見交換を行う。 ④ 面談に当たって配慮すべき事柄について、各グループの代表者がグループの意見を集約して発表する。	・生徒役には自分で被災状況を設定し、被災者になりきるよう指示をする。学級担任役には生徒の話を共感的に聴くよう助言する。 ・面談で苦労した点について情報を共有させ、その理由を考えさせる。 ・災害発生後よりも日常の取組こそが重要であることに気付かせる。
20分	5 今年度の本校の学校防災安全計画を確認し、改善点を協議する。 ① 学校防災安全計画に目を通す。 ② 本研修の学びを踏まえて、計画の改善点を各自で考える。 ③ グループ内で意見交換を行う。 ④ 各グループの代表者がグループの意見を集約して発表する。	・計画に目を通す時間を確実に提供する（見たことがない職員がいる可能性があるため）。 ・本研修では、心のケアに関する部分についてのみ改善案を考えさせる。

※様式は一例であり、教科等の都合で変更して構いません。

参考文献

- ・学校における子供の心のケア－サインを見逃さないために－（2014, 文部科学省）
- ・震災後における子供の心のケアのために（2013, 宮城県教育委員会）
- ・子どものトラウマ診療ガイドライン（2011, 子どもの心の診療ネットワーク事業 中央拠点病院 国立成育医療研究センター こころの診療部）

【学校マネジメントコース（現職）牛丸靖浩】

クライシスマネジメント研修

1 研修名・対象者

- ・災害発生直後に臨機応変に行動する力を高めるための研修
- ・管理職，教員

2 研修目標

- ・危機的状況下での集団における人間の心理について理解する。
- ・異常時に必要な「想像力」「危機感受性」「判断力」を身に付けることができる。

3 研修の実際（2／2） 90分

(1) ねらい

- ・図上演習を活用し、正解のない状況において、よりよい判断を下し行動できるようにする。

(2) 研修過程

時間	研 修 活 動	講師の支援 評価
5	1 研修1の振り返りと研修の概要を説明する	○非常時に多角的な視点をもつことの重要性を再認識し、本時の研修につなげるために、研修1で学んだことやクロスロードによる演習を想起させる。
5	2 研修のねらいを説明する	○危機的な状況で、教職員が「よりよい判断」をするために必要なことを学ぶ研修であることを伝える。
	状況を想像し、多様な意見から柔軟に判断するにはどうしたらよいだろうか	
15	3 臨機応変な行動に必要な力と非常時に必要な能力について学ぶ	○飛行機事故や東日本大震災でのJRの対応の事例を用いて、非常時に求められる能力について考えるようにする。
5	4 図上演習について説明する	○演習の方法を説明するとともに、再度、研修のねらいを確認する。
40	5 図上演習をする ・地図と震災の状況が書いてあるプリントを配布する ・4人程度の小グループにする (1) 異常時の状況を想像し、2つ程度の場面に設定する (2) 想定した場面について、多角的な視点で意見を出し合う	○参加者全員が想像できるように、地図は架空の地域にする。 ○災害時の多様な危険を予測できるようにするために、震災の状況は、「停電をしている」、「グラウンドがひび割れている」などの震災直後の学校から見えるような内容だけにする。 ○グループから1人司会をあらかじめ決めておき、司会の仕方や話し合いに困った際のアドバイスを書いた用紙を配布する。 ○時系列的に想定されるリスクをとらえることができるようにするために、いくつかの危機的場面を挙げ、グループの意見が分かれた内容に絞るよう助言する。

時間	研 修 活 動	講師の支援 評価
	(3) 場面に応じた「よりよい判断」を考える (4) 各グループによる場面と「よりよい判断」を発表する	○想定した場面が変化することを実感するために、追加の情報を提示する。 ○よい意思決定につなげるために、クロスロードによる演習を活用し、「異論」を挙げ、判断に多角的な意見を持ち寄るよう助言する。
10	6 研修のまとめ 大川小学校と雄勝小学校の震災直後の様子を提示する。	○状況に応じて、判断と行動を変えていく必要性をつかむために、各グループが今ある情報からどんな想像をしたのかを考えるよう指示する。
10	7 振り返り (1) グループによる振り返り	○研修の正解や震災対応の是非に話題がならないように注意する。 他のグループの発表を受けて、自己の決断をさらによいものに变更することができる。
	(2) 個人の振り返り	○子どもの命を最優先するために、教職員が普段から考え、話し合う環境をつくっていくことの大切さが伝わるようにする。 ○緊急時に判断を下し、行動を起こすことの難しさと大切さを心に止め、この研修を日常生活でも考えていくことを伝える。

※クロスロード「学校防災編」

阪神・淡路大震災で災害対応にあたった行政職員などの経験談をもとに開発したゲームである。

●ねらい

災害時には、「正解」のない状況に直面することが多く、あいまいな状況下でできるだけよい判断をすることが必要である。

よい意思決定をするためには、必要な情報をできるだけ集め、多角的な視点をもつために、積極的に「異論」を求めるようにすることが大切である。

●ゲームの内容

- ・ジレンマ状況下の意思決定について、「YES」「NO」で答えるゲーム
- ・5人以上の奇数の人数のグループをつくる
- ・災害時の状況を示すカードを読み上げて、その状況に対して、どう対応するかを「YES」「NO」のいずれかのカードを出す
- ・少数派の意見を提示し、説明できた人にはポイントがいく

(出典：平成29年度学校安全指導者養成研修の講義・演習「災害安全危機管理体制の現状と課題」)

【学校マネジメントコース（現職）鑑 基倫】

クライシスマネジメント研修

災害発生直後，学校はどんな行動をとれるだろうか

学校マネジメントコース（現職） 鑑 基倫

研修のねらい

大川小学校事故検証委員会報告書 提言(趣旨) 提言3

- 文部科学省は，学校現場のためのCRM訓練又はそれに類するノン・テクニカル・スキルの訓練手法を開発すること
- 都道府県・市町村教育委員会は，上記訓練手法を教職員研修に取り入れこと。また，校長，教頭などの管理職に平常時および緊急時のそれぞれに求められるリーダーシップの教育・訓練を実施すること
- 各学校は，教職員間のコミュニケーションを促し，(職位，年齢，経験などにおいて)下の者から上の者への意見の表明，間違いの指摘がしやすい職場風土を醸成するとともに，上の者が必要なリーダーシップを発揮できるよう，適切な権威勾配を維持するよう努める

研修のねらい

災害発生時に必要な能力とは？

想定外への備え
うまく立ち回る応用力

研修課題

状況を想像し，多様な意見から柔軟に
判断するにはどうしたらよいだろうか

レジリエント行動

マイアミ航空事故の教訓

スーシティ航空事故の教訓

チーム行動の問題点

- リーダー不在
- 不正確な情報伝達
- 遠慮による伝達不能
- 集団浅慮

異常時に必要な能力

情報がそろっていない
状況で、その後の展開
を想像できる力

想像力

冷静になって最善の
行動を判断できる力

危険感受性

異常時の切迫した状況の中で
判断する際のジレンマに対する耐性

判断力



行動力

図上演習

研修課題

状況を想像し，多様な意見から柔軟に
判断するにはどうしたらよいだろうか

- 1 震架空の地図を配布
- 2 地図から状況を予想
- 3 グループで場面を想定
- 4 多様な想像を試してみる
- 5 状況の追加
- 6 最善の判断

震災の状況
「停電をしている」
「グラウンドがひび
割れている」

地 域 復 興 の た め の 教 職 員 研 修
～ 豪雨による洪水災害の避難所開設・運営の動きを中心に ～

1 研修の概要・対象者

- ・災害発生後に、自校が地域の避難場所となった場合を想定し、円滑な避難所の開設と運営に向けて行動する力を高める研修
- ・教職員（教員 18 名，事務職員 1 名，校務員 2 名）

2 研修のねらい

- ・地域の避難所を開設・運営するための対応手順を考えことを通して、教職員が自分自身の役割を理解し、学校として想定される問題や対応について共通理解する。

3 研修の実際（90分）

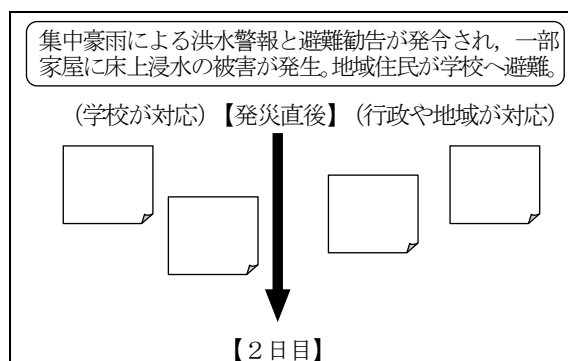
時間	研 修 活 動	講師の支援 評価（方法）
5	1 研修の概要を説明する。	○秋田県南部の豪雨災害（7・8月）やダウンバースト被害（9月）を振り返り、学校は児童の安全確保と共に、大規模災害時には地域住民の避難所としての役割を担う二つの役割を確認する。 ○避難所開設・運営に関する教職員の共通理解が不十分であることから、避難所開設・運営を想定した対応手順を話し合う必要性があることを確認する。
5	2 研修のねらいを説明する。	○地域住民が学校に避難してきたら、避難所となる学校に求められる対応について考える研修であることを伝える。
児童が在校時に、地域住民が避難してきたら、学校はどんな対応が必要だろうか		
10	3 本校の地理的立地条件について確認する。	○行政が作成した「洪水ハザードマップ」を用いて、本校が盆地内の丘陵地に位置し、2km東に一級河川が流れる地理的特徴があり、大規模洪水が発生すると避難所となることを確認する。
15	4 演習Ⅰ「児童への対応」を行う。 （1）演習の災害設定や進め方を確認する。	○災害状況を、児童が在校時、学区内に集中豪雨による洪水警報と避難勧告が発令され、一部家屋に床上浸水の被害が発生している設定とする。 ○演習の進め方を演習Ⅰ「児童への対応」と演習Ⅱ「避難所開設・運営の支援」の2段階に分けて進める。 ○演習グループ4班（一グループ5～6人）にし、司会役1名と報告役1名を決めるようにする。
	（2）演習Ⅰ「児童への対応」を意見交流し、確認する。	○児童が在校する場合、洪水警報の発令や学区内の浸水情報を受けた際の先生方の動きをグループ内で意見交換

		し、付箋紙に書いて時系列に並べることを確認する。 ○児童への対応（安全確保、避難誘導、全体で安全確認、下校・引き渡し、場合によっては学校待機）が想定されることを確認する。
3 5	5 演習Ⅱ「避難所開設・運営の支援」を行う。 (1) 学校に迫られる対応について考え、グループで意見交流し、発表する。 (2) 他のグループの意見も含めて対応を時系列に並べる。 (3) 学校として準備すべきこと(もの)をグループ内で意見交流し、全体に報告する。	○自宅が浸水した多くの地域の人たちが学校に避難して来て、発災（発災日～2日目）に、学校が迫られる対応について考えることを確認する。 ○付箋紙に考えられる学校の対応を書き出し、可視化できるようにする。 ○付箋紙を時系列に並べる拡大研修シートを準備する。 ○「学校が対応すべきこと」と「行政や地域が対応すること」に分類して整理することを確認する。 ○付箋紙を貼った拡大研修シートに、学校として準備すること(もの)をキーワード化したり、意見を短文で書き加えたりするように指示する。
1 0	6 研修のまとめ	○「秋田市立学校における災害対応および避難所開設・運営の支援に関する指針」（H24秋田市教育委員会）を紹介し、グループの意見への補足説明をする。
1 0	7 振り返り ・グループ内で演習を通した気付きを交流する。	○地域や関係機関との連携した危機管理意識を高めることが大切であることを伝える。 避難所を開設・運営する上での学校の対応について具体的に見通しをもち、自分の役割や学校に必要な準備すべきことが理解できる。(グループ内での振り返り)

4 この研修の効果

- ・全ての教職員が、学校が避難所となった場合の自分の役割を理解することで、危機管理意識の向上に繋がる。
- ・学校が避難所になることを想定し対策をとることで、災害時に臨機応変に対応できる。

5 研修シートのイメージ



<参考文献・参考資料>

- ・「学校に避難所が開設された場合を想定して」
(兵庫県立教育研修所)
www.hyogo-c.ed.jp/~somu-bo/bosai/hinansyosetumei.pdf
- ・「秋田市立学校における災害対応および避難所開設・運営の支援の指針」（H24.4 秋田市教育委員会）

【カリキュラム・授業開発コース（現職）藤原英樹】

復興教育研修プログラム指導案

1 研修名・対象者

「地域振興につなげる復興教育の在り方について」

・県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教員

2 研修の目標

復興教育の実際を知り、復興教育を地域振興に資する持続的・発展的な取組にするための要件について理解を深めるとともに、その在り方を考える。

3 研修の実際 (90 分)

時間	研修内容	講師の支援 評価
5	1 研修のねらいを知る。	・復興教育についての知識を深めることと、参加者それぞれが地域振興に資する復興教育の在り方について考えることが目的であることを伝える。
	復興教育の実際と地域振興推進のための取組を知り、地域振興に資する復興教育の在り方を考える。	
2	2 今日の研修の流れを知る。	
10	3 復興教育についての国や各自治体の捉え方を知る。	・復興教育については様々な捉え方がされていることが分かるように、文科省とある自治体の定義の両方を紹介する。
20	4 復興教育の実際について知る。 (1) 石巻市雄勝小学校 「震災復興まちづくりプラン」 (2) 気仙沼市 「気仙沼 ESD」	・視点をもって見られるように、映像視聴後に協議をしてもらうことと、協議の視点を伝える。 協議の視点「2つの実践において、良かった点、課題と思われる点はどこか。」 ・3での復興教育の捉え方がどのように実践に生かされているか分かりやすくするため、雄勝小学校の映像から流す。
15	5 協議 (1) 個人で考えた後、隣の人と意見交換をする。 (2) 何人かに発表してもらう。	・スムーズに意見交換を始められるように、最初にお互いの簡単な自己紹介（校種、出身地、自校の所在地）を行ってから始めるように伝える。
20	6 地域振興推進のための取組について知る。 (1) 地域振興の主な施策	・(2)の各段階において、児童生徒の行動目標と、そのために教師や地域の大人が果たす役割が分かるように、分けて説明する。

18	(2) 地域振興推進のための取組 7 まとめ (1) 復興教育の効果 (2) 復興教育の在り方とは ・ 隣の人との意見交換	・ 4 の各実践が地域振興に資する取組になっていることに気付くことができるように、(1) (2) について各実践を例に挙げて説明する。 ・ 各々が考えた復興教育の在り方を簡単にまとめて話すとともに、他の考えに触れることができるように、5 と同じペアの人と意見交換をする。 復興教育の実際と地域振興の取組について理解を深め、地域振興に資する復興教育とはどのようにあればよいかについて、自分なりの考えをもつことができる。
----	---	--

【発達教育・特別支援教育コース（現職）今野菜穂子】

地域振興につなげる 復興教育の在り方について

〇〇総合教育センター 研修講座

今野 菜穂子

研修のねらい

復興教育の
実際

地域振興の
ための取組

地域振興に資する
復興教育の在り方を考える

本日の研修

- ▶ 1 復興教育とは
- ▶ 2 復興教育の実際
 - (1) 石巻市雄勝小学校「震災復興まちづくりプラン」
 - (2) 気仙沼市「気仙沼のESD」 * ペアで意見交換
- ▶ 3 地域振興につなげるために
 - (1) 地域振興の主な施策
 - (2) 地域振興推進のための段階的取組
- ▶ 4 復興教育の在り方とは
 - (1) 復興教育の効果
 - (2) 在り方を考える * ペアで意見交換

1 復興教育とは

<文部科学省 >

東日本大震災の教訓を踏まえ、被災地の復興とともに、我が国全体が希望を持って、未来に向かって前進していけるようにするための教育。

- ①社会を生き抜く力の養成
- ②絆づくりとコミュニティの再構築
- ③未来への飛躍を実現する人材の養成
- ④学びのセーフティーネット

東北の取組を全国へ

1 復興教育とは

＜石巻市雄勝町＞

- ①「子どもは地域の宝」という子ども観
- ②「故郷を愛し、故郷を復興する社会参加の学力」という学力観
- ③「地域の復興なくして学校の再生なし」という地域復興と一体化した学校経営観

地域復興に貢献する
学校づくり

2 復興教育の実際

(1) 石巻市雄勝小学校

「震災復興まちづくりプラン」



2 復興教育の実際

(2) 気仙沼市「気仙沼のESD」



3 地域振興につなげるために

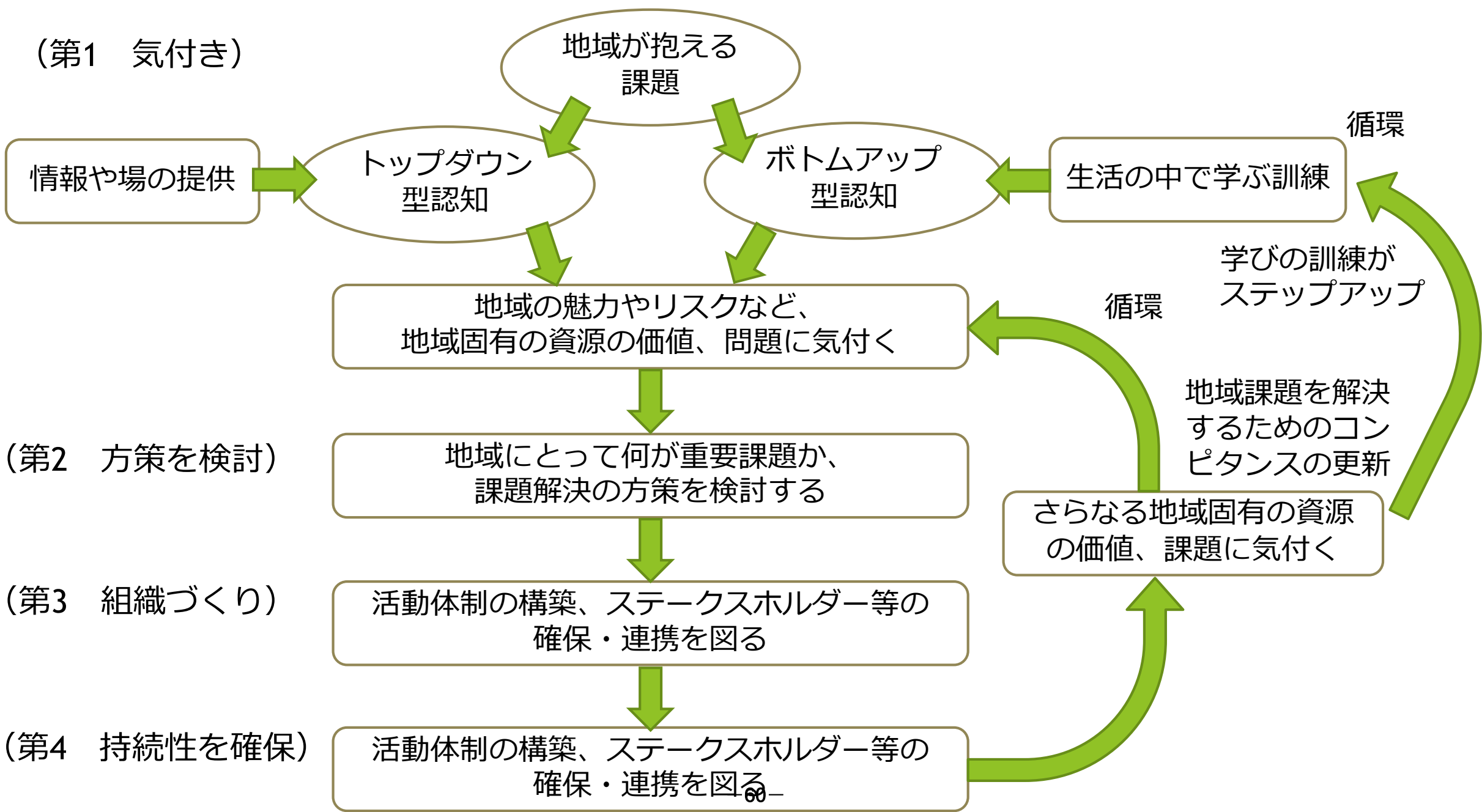
(1) 地域振興の主な施策

- ・ 歴史文化伝統など、
地域固有の資源を持ったふるさとづくり
- ・ 地域の絆づくりと
活力ある地域コミュニティの再生
- ・ 地域の資源を生かした地域の産業の活性化
- ・ 安心安全な地域社会の仕組みづくり
- ・ 各種の取組を担っていくための人づくり

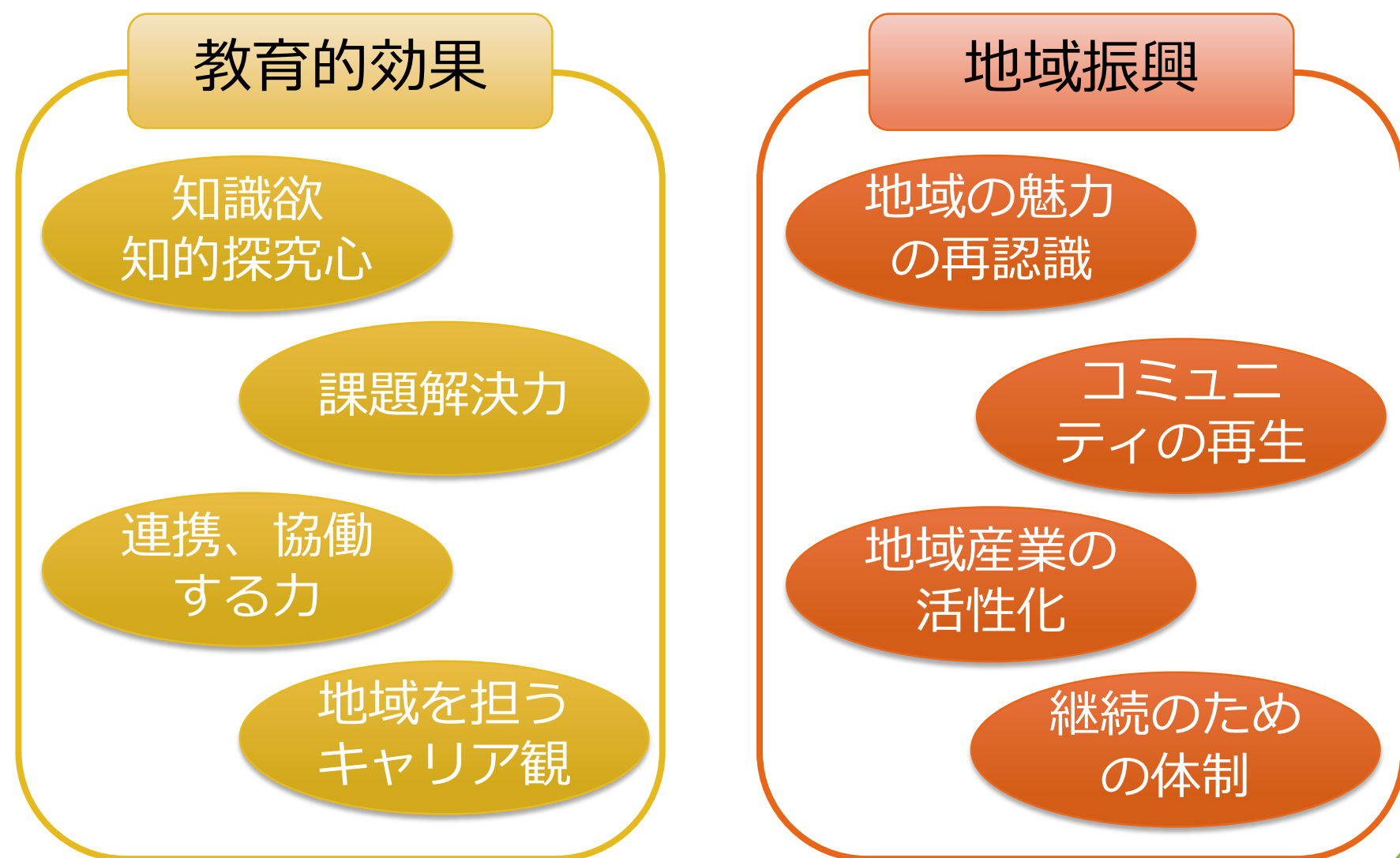
3 地域振興につなげるために

(2) 地域振興推進のための段階的取組

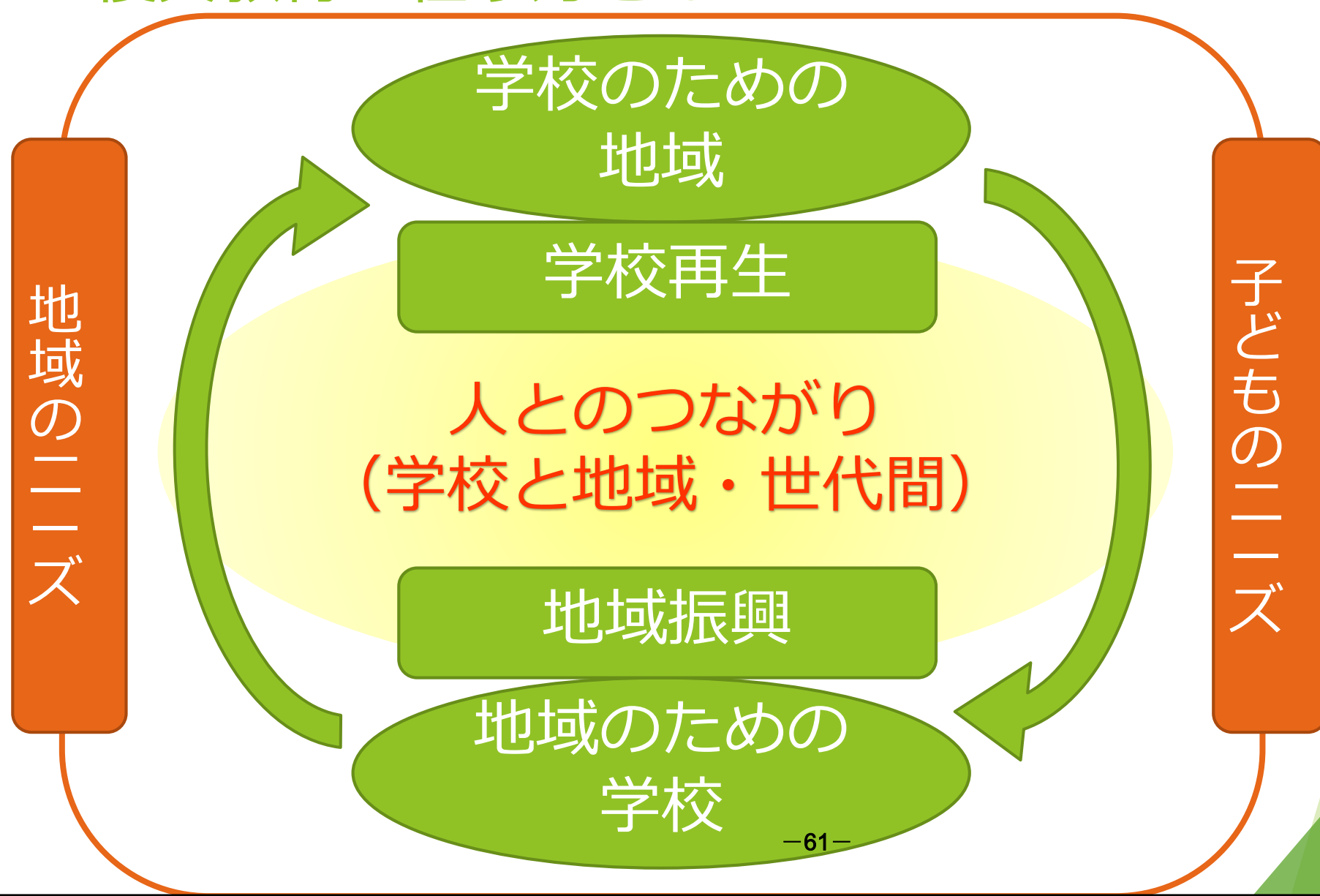
- 第1 地域の魅力や価値、課題への気付き
- 第2 課題解決の方策を検討
- 第3 活動体制及び
ステークスホルダーの確保
- 第4 持続的、発展的仕組みの構築



4 復興教育の在り方とは



4 復興教育の在り方とは



中学部第2学年 生活単元学習指導案

1 単元名 防災を学ぼう！

2 単元の目標

- ・地震がいつ来てもおかしくないという意識を持ち、急な震災でも落ち着いて行動しようとする態度を養う。 (関心・意欲・態度)
- ・地震が起きたときにどのように行動すればよいか考え、表現できる。 (思考・判断・表現)

3 本時の実際 (本時 8 / 8)

(1) ねらい

- ・避難訓練と秋田県消防学校防災センターでの体験から、もし地震が来たらどのように行動すべきか考え、表現できる。 (思考・判断・表現)

(2) 個別のねらい

- ・A(男)地震の揺れを体験した際にとっても動揺したことを踏まえ、落ち着いて行動するための方法を考えることができる。
- ・B(男)教員の指示をしっかりと聞いて動くなど、具体的な行動について考えることができる。
- ・C(男)どのような行動が考えられるか教師と話しながら決めることができる。
- ・D(男)地震の際にどのように行動するのか順を追って考えることができる。
- ・E(男)地震の際の動きについて文章を使って表現できる。
- ・F(男)地震が来たらどうするのかを写真などを見ながら想像し、対応について考えることができる。

(3) 学習過程

時間	学 習 活 動	教師の支援 評価 (方法)
10分	1 避難訓練と防災教育センターでの体験を写真や動画でふり返る。	・その時の心情が思い出せるように表情や言葉に注目するよう助言する。 - A: 体験時の心情を聞き、付箋でメモして机に貼る。 - F: 具体的な場面の想定につながるよう、どのように揺れたか、時間はどれくらいだったかなどの情報を確認する。
	本当に地震が来たときどう動くか考えよう！	
15分	2 写真やキーワードを順番に並べる。	・考えやすいように具体的な場所や時間を学校で午前11時に発生したものと指定する。

15分	3 画用紙に写真とキーワードを貼り確認カードを作成する。	・体験を学びに生かせるように、生徒それぞれに小さいサイズの写真をプリントアウトしたものを渡す。 ・1の振り返りからどのような順番で避難したのかなどを意識するよう言葉かけする。 ・体験の振り返りやメモに書いた言葉をキーワードとして使えるように短冊を渡す。 B、C：自分で並べ替えが難しい場合は、教師と共に選択できるよう写真からまずやるべきこと、次にすべきことなど順番に質問する。 D：何からするべきか迷った際に再度動画や写真を見て確認しながら作業できるようにする。
5分	4 作ったカードを紹介し合う。	・どのように作るのかイメージを持てるよう完成したカードを見せる。 - A：揺れた時の気持ちや慌てた時どうするかなどを短冊に書いて貼るよう言葉かけする。 - B：並べ替えた写真に合わせてどのようなキーワードがあるとよいか教師と一緒に決め、真似して書けるように手本を書く。 - C：並べ替えた写真に合わせて教師と一緒にキーワードを決め、教師がカードに記入する。 - E：キーワードを使いながら、文章でカードを作成するよう言葉かけする。 ・カードの中でも工夫された部分の紹介ができるように、教師から紹介してほしい部分を指定する。 評価 避難訓練と防災教育センターでの体験からもし地震が来たらどのように行動するべきか考え、表現できている。（活動の様子から見取る。）

また、本時のあとにこのカードを実際に活用する場面を設定したいと思います。

【発達教育・特別支援教育コース（学卒）保坂迪菜】

中学校第1学年1組 訓練プログラム学習指導案

1. 単元名「身近な地域における災害とその対策」

2. 単元の目標

- (1) 身近な地域における災害の特色を知り、それぞれの災害に対応した避難行動を取ることができる。(知識・技能)
- (2) 身近な地域における災害にはどのような特色があるのかということや、その災害に対応した未然防止策や避難行動を考えることができる。(思考・判断・表現)
- (3) 身近な地域における災害の特色とその対応策について学び、今後の生活に活かすことができる。(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元設定の理由

(1) 生徒観

1年1組は、男子8名、女子3名の計11名の学級である。1年1組の生徒は皆、意欲的に学習に取り組むことができている。それは、どの教科の授業でも同じように意欲的に授業に取り組むことができている。また、本学級は主に3つの小学校から集まってできた学級であるのだが、生徒たちは異なる出身の小学校の生徒ともグループ活動などで協力しながら学習に取り組むことができている。このように、1年1組の生徒は授業に意欲的に取り組み、かつグループ活動など仲間と協力して学びを深めることができる生徒たちである。

一方で、学んだことを今後の実生活に活かすということに課題が見られる。この点については、まだ中学校1年生段階であるため、学んだことを少しずつ実生活に活かせるような指導や学んだことが将来何の役に立つのかということを考える指導をしていきたい。また、今回の単元で扱う災害とその対応策について考えることはこれから生きていく上でとても大切なことである。そのため、災害に関する知識を深めることに加えて、学んだことを基に、今後災害に遭ってしまった時に実際に避難をすることができるように指導していきたい。

(2) 単元観

本単元は、『平成29年度版学習指導要領解説 社会編』の地理的分野の内容「C 日本の様々な地域」の「(3) 日本の諸地域」及び『平成29年度版学習指導要領解説 理科編』の第2分野の内容「(2) 大地の成り立ちと変化」及び『平成29年度版学習指導要領解説 特別活動編』の学校行事の内容「(3) 健康安全・体育的行事」に該当する。本単元で扱う身近な地域の災害について学ぶことは重要である。特に、本県(秋田県)では、2017年7月に大雨により大仙市で家屋が浸水するという甚大な被害が出た。秋田市でも、一部の地域では浸水するなどの被害が出ている。このように、災害はいつ起こるか分からないものであるし、身近に起こるものであることから、いつ起きても良いように災害に対する知識を深め、避難行動などの対応を取ることが大切である。

また、本単元では身近な地域の災害として、対象地域としては秋田市を取り上げる。取り上げる災害は、例年扱われてきた地震に加え、今年秋田市で猛威をふるった大雨についても取り上げていきたい。

(3) 指導観

本単元では、主に社会科、理科、特別活動の授業を基に、教科横断的に災害について学習することができるよう指導していきたい。

まず、理科では、大雨が降る時の天気の状態や、大雨がもたらす被害などを理科の視点から知識を理解することができるよう指導していきたい。その際、ICT 機器を用いて、雲のでき方などを動画などで視覚的に理解することができるようにしていきたい。次に、社会科では、理科で学んだ大雨に関する知識を基に GIS を用いてハザードマップを作成するよう学習活動を取り入れたい。実際にハザードマップを作成する過程で、身の回りにどんな危険があるのかを考えられるよう指導したい。そして、特別活動では主に避難訓練を行うことによって、実際に災害が起きたときにどのように対応すればよいのかを実感を伴って理解することができるよう指導していきたい。その際、災害が起きた時にどのような避難行動を取ればよいのかということに加え、他者と協力しながら避難するといった自助・共助・公助の視点についても踏まえながら、避難することができるよう指導していきたい。

4. 全体計画（総時数 4 時間）

教科	目標	主な学習活動・内容	時数
理科	○大雨がどのような被害をもたらすのかということについて考えることができる。(思考・判断・表現)	○大雨がどのような被害をもたらすのかということを、ICT 機器を用いた動画を基に考える。	1
社会科	○大雨が発生した時の危険箇所はどのような場所にあるのかを考えることができる。(思考・判断・表現)	○GIS を基に、大雨時のハザードマップを作成する。	1
特別活動	○大雨時に対応した適切な避難行動を取りながら、自分の身を守ることに加え、他者と協力しながら避難することができる。(知識・技能)	○校内放送を基に、実際に避難行動を取る。	1 (本時 3 / 4)
	○これまで学んだ災害に関する知識や避難行動の経験を今後の生活に活かすことができる。(主体的に学習に取り組む態度)	○理科や社会科で学んだ災害に関する知識や、避難行動の振り返りを基に、今後の生活にどのように活かすことができるのかを話し合う。	1

5. 本時の実際

(1) ねらい

- ・大雨時に対応した適切な避難行動を取りながら、自分の身を守ることに加え、他者と協力しながら避難することができる。(知識・技能)

(2) 学習過程 (3 / 4)

※実際の災害場面を想定して、授業の途中で校内放送を流してもよい。

時間	学習活動	教師の支援	資料・評価
10 分	1. 校内放送を聞く。	○生徒が落ち着いて避難行動を取ることができるように、校内放送を聞くよう声掛けをする。	○校内放送
15 分	2. 校内放送の指示通り、避難行動を開始する。	○洪水に巻き込まれないようにするために、大雨で浸水した校舎の 1 階には絶対に寄らないように注意を促す。 ○速やかに行動できるよう、代表委員を中心に整列するよう指示する。	
15 分	3. 校舎の 3 階または屋上に到達したら、人数を確認する。	○全員が 3 階または屋上に避難できたかどうかを確認するために、教師・代表委員を中心に人数を確認するよう助言する。	
10 分	4. 校長からの講評を聞く。	○実際に大雨災害が起こったときにも避難行動を取ることができるように、しっかりと話を聞くよう指示する。	○校内放送を基に、落ち着いて避難行動を取り、かつクラスメートや地域住民と協力しながら避難することができる。＜知識・技能／観察＞

【カリキュラム・授業開発コース (学卒) 竹内恭平】

6年〇組 総合的な学習の時間 指導案

1 単元名 自然災害（大雨）に備えよう

2 単元の目標

- ・身近な自然災害について調べ、正しい知識を身に付ける。
- ・自分の住む地域では、どのような災害が起こりえるかを考えることができる。
- ・自分の住む地域では、どのような避難の仕方や雨への対策が望ましいかを考えることができる。

3 この地域の特徴

秋田市立〇〇小学校の学区は広く、〇〇小学校を中心に北と東に田んぼや山、西には街（国道）、南には住宅地がある。△町・××方面には雨によって氾濫しやすい□□川があり、雨の度に警戒をしている。秋田市災害ハザードマップでも浸水する地域が明記されている。

4 全体計画

時間	主な学習活動	教師の支援
1	○身近な自然災害について調べ、正しい知識を身に付ける。	・自然災害全般に対して課題意識（危機意識？）をもてるように、過去にあった自然災害について紹介する。 ・子どもにとって1番身近と思われる「大雨」に焦点化して学習を進める。
2	・身近な自然災害にはどのようなものがあるかを考え、今までの経験からどんな被害が想定されるかを考える。 ・特に大雨について、日本全国・最近5年程度の被害状況についてインターネットを用いて調べる。 ・グループ別にある年の大雨について調べることにし、分かったことをグループでまとめる。	
3	・グループでまとめたものを、ジグソー法で共有する。	
4	○自分の住む地域では、どのような災害が起こりえるかを考えることができる。	・大雨に関して危機意識をもてるように、1人1人が情報を伝え合う機会を設ける。 ・ハザードマップを提示し、特にどの地域が危険かを確認する。 ・後に雨危険マップを作成することを伝え、どこに注目して調査をすればいいのかを焦点化する。 ・雨の日に実際に自分の町内を歩く機会を設ける。 ・地域の人に活動を見守ってもらえるように依頼する。 ・子ども達がインタビューできるように、地域の人に普段雨の日に思うことを自由に話してもらえるように依頼する。
5・6	・ハザードマップ外は危険ではないのかという問いから、「安全」と言われている場所で想定される危険を考える。 ・雨の日を狙って、町内ごとに雨が降ったら気を付けなければならない箇所を探しに行く。（調査）	
7	○自分の住む地域では、どのような避難の仕方や雨への対策が望ましいかを考えることができる。	
8	・調査でわかったことをグループごとにまとめ、町内ごとにマップを作成する。 ・作成したマップをもとに、事前にどんな対策をとれるかを考える。	・地域の人や保護者を対象とし、発表会を行う。 ・学習後、可能であれば地域といっしょに行う避難訓練を計画する。
9	・地域の人にマップの説明や、考えた雨対策についての発表会をする。	

5 本時の実際（本時 7 / 9 ）

(1) ねらい

- ・雨の日対策マップ作りを通して、自分の住む地域ではどのような対策が望ましいかを考える。

(2) 学習過程

時間	学習活動 ・ 予想される児童の反応	教師の支援 評価（方法）
5 分	1 学習課題の確認をする。 雨の日対策マップを作ろう。	○学習課題と作業の手順を確認する。
15 分	2 各グループで見つけた危険な箇所を共有する。 ・このマンホール、前に水が溢れたのを見たことがあるよ。 ・葉っぱで水路がつまっていた。 ・この田んぼ道はぬかるんでいて、危ないんじゃないか。 ・この川が濁ったら氾濫すると教えて貰った。 ・下り坂の1番下って、いつも水たまりが深くなっていて危ない。	○危険だと思ったところを話し合えるように、各グループに撮影した写真を自由に見られる状態にする。 ※このグループは調査班（町内ごと） ○「もしも」の話が非現実的になりすぎないように、なぜそう判断したのかも説明できるようにメモを残すよう指示する。
20 分	3 実際に対策マップを作成する。	○対策マップを作成しやすいように、町内の地図自体はあらかじめ準備しておく。 ○発表することも踏まえ、マップを作るときには、写真や説明文も入れて、見る人に分かりやすくなるように心がけることを声かけする。 ○作成途中で他のグループの工夫を真似できるように、マップを見合う時間を設定する。 ○危険な箇所について気付かなかったことに気付いた場合、随時追加してもよいことにする。
5 分	4 振り返りをする。 ・もし避難するときに暗かったら ・雨の日だから長靴で避難するのがいいのかな ・雨が降る前に、普段からできることは…	○マップを作った上で、実際に避難するときや、事前にどのようなことに注意したらよいかということを振り返りにし、次時に全体で共有する。 自分の住む地域の大雨対策について考えることができる。（発言・ふりかえり）

4 年〇組 特別活動学習指導案

1 題材名 ストレス対処法

2 題材の目標

- ・ストレス対処法について自分の経験からいくつか挙げることができる。【ストレス対処法への関心・意欲・態度】
- ・ストレスが心や体に及ぼす影響を知り、自分に合ったストレス対処法を見つけることができる。
【ストレス対処法への思考・判断・実践】
- ・様々な対処法を理解することができる。
【ストレス対処法への知識・理解】

3 本時の実際（本時 1/1 ）

(1) ねらい

様々な対処法を理解することができる。

(2) 学習過程

時間	学習活動	教師の支援 評価
5 分	1 立位体前屈を行う。	
5 分	2 学習課題をつかむ。 いろいろなリラクゼーション法を体験しよう！	・導入で本時ではリラクゼーションする方法について考えたり実践したりすることを説明する。
15 分	3 どのようなときにストレスを感じるか話し合う。 また、そのような体験をした時にどのように対処しているか考える。 ・グループごとに考えを発表し、全体で共有する。 〈例〉ストレッチ 深呼吸 友達とおしゃべりをする 音楽を聴く	・ストレスという言葉から具体的なイメージが持てるような支援を行う。 ・個人、グループの順に考え、その後全体で共有し、多様な解消法・対処法に触れることができるようにする。
15 分	4 いろいろなリラクゼーション法を体験する。 ・ https://www.ajcp.info/heart311/?page_id=2038 ・背伸び ・肩のリラクゼーション ・10 秒呼吸法	・肩のリラクゼーションや 10 秒呼吸法は動画を視聴し、それに合わせて行うよう指示する。 様々な対処法を理解することができる。 【知識・理解】（児童観察・学習カード）
5 分	5 振り返りをする。 ・本時の感想を記入する。	・本時の学習での学びを日常生活で実践するよう促す。

【カリキュラム・授業開発コース（学卒）近藤大地】

〇〇中学校 3 年 A 組 特別活動指導案

1 議題 「ストレスに対処するためにできること」

2 本時の実際（本時 1 / 1 ）

(1) ねらい

- ・ ストレスを感じた際に自分にどのような変化が起こるのかを理解し、対処法を考える。（学級活動（2）ーキ）

(2) 学習過程

時間	学 習 活 動	指導上の留意点
5	1 ストレスという言葉からどんなイメージを持つか考える。	・ 学級全体に質問し、生徒から出てきたイメージを板書する。
	どのようなストレス対処法があるか考えよう	
10	2 どんな時にストレスを感じるか考える。その後、ストレスを感じたときにどんな変化が起こるのか考え、クラスで共有する。	・ 生徒が考えやすくするために、教師がストレスを感じる場面と自分の体に起こる変化を紹介する。 （怒られた時、イライラする・力が入る）
8	3 自分がストレスを感じる場面を3つ考え、ストレスを発散するために自分がどのような行動をしているかを考える。	・ 人それぞれの解消法があることに気づかせるために、校内の教師のストレス解消法を3つ紹介する。（歌を歌う、スポーツをする、ごはんをたくさん食べる）
17	4 6人グループを作り、ストレス対処法を発表し合う。	・ 話し合いを始めやすくするために、グループの中の発表順を指定する。
5	5 他の人のどのようなストレス対処法がよいと思ったかを振り返りカードに記入する。	

【カリキュラム・授業開発コース（学卒）保達諒平】

第 1 学年 学級活動指導案

1 題材名 みんなと心をつなげよう

2 目標

- ・友だちと仲良く遊ぶための嬉しい言葉かけや、相手が悲しくなる言葉について気づき、今後の日常生活に活かすことができる。
- ・友だちと仲良く遊ぶための言葉かけについて、ロールプレイを通して考え、判断し、実践しようとする事ができる。
- ・進んで活動に参加し、友だちと仲良くしようとしている。

3 本時の実際

(1) ねらい

友だちと仲良く遊ぶための言葉かけの仕方を知り、互いに思いやる事ができる。

(2) 学習過程

時間	学 習 活 動	教師の支援 評価(方法)
導入 7分	1. 事前のアンケートの結果を知る。	・自分自身の問題として考えることができるように、アンケートの結果から、嬉しい言葉ばかりではなく、言われて、悲しくなった言葉にも注目する。 ・気持ちが可視化できるようにそれぞれの顔の表情のマークを用意する。
	ともだちと なかよくあそぶための ことばを たくさん みつけよう！	
展開 23分	2. 「いやな言葉」と「うれしくなる言葉」をリスとウサギゲームをして、ロールプレイをする。	・嬉しい言葉に気づくことができるよう、役割演技をする。
	3. ロールプレイで感じたことを発表する。	・自分なりの考えをもつことができるように、多様な考えを取り上げる。
終末 15分	4. 友だちにかけてあげたい言葉をカードに書いて発表する。	・継続が図れるように、カードを木の実に見立てて、木に貼るよう指示する。また、これから自由に掲示できることを伝える。
	5. 本時を振り返る。	友だちと仲良く遊ぶための言葉かけの仕方を知り、互いに思いやる事ができる。 【発言・シート】

【カリキュラム・授業開発コース（学卒）若松彩花】

1. 単元名 守れ！ぼくらの五城目朝市！！

2. 被害の状況

連日の集中豪雨の影響で、五城目町の街中を流れる馬場目川が氾濫し、浸水想定区域が5.0m未満の区域は全て被害を受け、民家や農作物は大川地区、馬場目地区を中心に広範囲にわたって甚大な被害を受けた。それに加えて、森山地区、内川地区、富津内地区において土砂崩れが発生し民家や交通状況にも大きな被害ももたらした。幸いにも被害を受けた地区の住民は避難していたため負傷者は出なかったが記録的豪雨影響で。

3. 現在の状況

集中豪雨から1か月後、工事のおかげで通行止めになっていた道路が開通し、交通状況は回復した。しかし、いまだに農作物の被害の復興が進まず。農家を営んでいる人は今年度の収穫が望めず、意気消沈ムード。その影響が500年の歴史をもつ、五城目朝市にも表れている。出店数が例年の半数以下に減り、農作物を扱う店が数点しかなくて、更に不作の影響で違法並みに値段が高くて購入客もほとんどいない。このままでは、集客を五城目ジャスコに奪われ歴史と伝統のある五城目朝市が衰退してしまうことが危惧される。



図 五城目町（「コトバンク」より）

4. 単元の構成

時数	ねらい	学習内容
1、2	・集中豪雨が五城目町にもたらした被害を知り、朝市や五城目町の復興についての関心を高める。	・被害を受けた住民や農家の話を聞く。 ・感じたことや思ったことを共有する。
3 (本時)	・現状をふまえて、今の自分たちにできることは何か考える。	・朝市復興や五城目町のために自分たちにできることを考える。
4、5、 6、7	・朝市や五城目町の復興のための計画を立て、実行する。	・チームごとに分かれて、朝市や五城目町の復興のための活動を行う。
8、9、 10	・チームごとに実行した活動やその意図を他者へわかりやすく伝える。	・チーム単位で行った内容についてまとめ（8、9時間目）、発表する（10時間目）。

5. 本時の実際（本時 3 / 10）

（1）ねらい

現状をふまえて、今の自分たちにできることは何か考えることができる。

（2）学習過程

	学習活動	指導上の留意点 ^{評価}
導入	1. 前時の内容を振り返る。 ・被害が大きかった ・農家がまだ復興できていない →自分たちにできることはないだろうか。	・児童の感想で自分たちにできることについて述べているものを取り上げ、本時の学習の見通しを持たせる。
	2. 本時の学習課題を把握する 五城目町のために私たちに何ができるだろうか。	
展開	3. 朝市や五城目町の復興のためにできることを考える。 ・朝市のもをかう。 ・自分たちでモノをつくって売る。 ・朝市を宣伝する（ポスター）。 ・ものを製作して朝市に提供する。 ・農家の人のお手伝いをする。	・自分たちでできることの見通しがもてるように、このままではどのようなことが危惧されるかというポイントに対応させて考えるように助言する。
	4. 考えたことを全体で共有し、それが可能かを話し合う。 ・ものをつくって売るとなるとつくるものによっては難しいのではないか。（図工の作品のようなものはできるが、野菜類は農家が困難なら自分たちは不可能なのではないか。）	・可能か判断する基準として、時間的な制限と経済的な制限があることを説明する。 ・外に発信できるものに絞るために、自分の意識にかかわることについては個人的な目標として各々努力するようにと助言する。
終末	5. グループになって共有したことを参考に自分たちの活動内容を決定する。 ・何をどういった計画で行うのか ・何の目的でそれを行うのか ・それによってどのような効果が予想されるか	・実現可能な計画にするために、机間指導の際に、不明確な部分を指摘し、具体的に話し合うように指示する。 現状をふまえて、現実可能な範囲で今の自分たちにできることは何かを考えている。 (発言、シート)
	6. 学習をふり返り、感想を話し合う。	

【カリキュラム・授業開発コース（学卒）佐藤貴大】

第5学年特別活動学習指導案

1. 被害の状況(秋田県の沿岸部、地震による津波の被害を想定)

日本海秋田県沿岸で発生した地震により、秋田県沿岸に津波が押し寄せ、学校の所在地である秋田県沿岸南部のN市では、N市内の多くの家屋で床上浸水、特に海に近い地域では家屋が倒壊するなどの被害を受けた。小学校も例外ではなく、床上浸水により、一時は小学校での授業を行えず、児童たちも避難所暮らしを余儀なくされ、学校はしばらく臨時休校となった。また、海水浴場や港についても被害を受け、たくさんのものが漂流し、汚れたり、樹木が倒れたりするなどの被害を受けた。町として、産業の基盤である漁業の復興や、観光の起点となる海水浴場などの復興が早急に求められる。

2. 現在の状況

損壊した校舎の一部を修理し、授業が再開した。しかし、すべての児童が自宅に戻れたというわけではなく、現在も避難所生活を余儀なくされている児童がいる。町全体の様子としては、家屋や建物の損壊した部分の修復、倒壊した家屋の瓦礫の撤去などが進んできてはいるが、震災とそれに伴う津波の被害を受ける以前の生活を取り戻したとは言えず、子どもたちと心のケアと地域の復興が求められる。

3. 単元名

私たちの町の復興大作戦！(8時間)

4. 単元の計画

時間	ねらい	内容
1, 2	震災及び津波の被害により失われたもの、これから復興していきたいことについて考える。	・震災及び津波の被害を見つめ直し、町がどのように復興していけばいいのかについて考える。
3, 4	自分たちが出来る活動について考える。	・自分たちが町の復興のために出来ることを考え、それが実現可能か話し合う。
5, 6	植樹プロジェクトについて知り、海水浴場に植樹を行うことの見通しを持つ。	・植樹プロジェクトについて紹介し、児童が各自で情報収集をし、植樹を行った未来の町のイメージ図を書き、見通しを持ち計画を立てる。
7, 8	復興のための海水浴場での植樹活動を地域の中で実際に行う。	海水浴場に訪れ、実際に植樹を行うボランティアを行う。

5. 本時の実際（本時 6 / 8）

(1) ねらい

- ・植樹プロジェクトについて知り、海水浴場に植樹を行うことの見通しを持つ。
【関心・意欲・態度】

(2) 学習過程

時間	学 習 活 動	教師の支援 評価（方法）
	1. 前回調べた植樹プロジェクトについての情報を共有する。 〈予想される児童の反応〉 ・東日本大震災の復興のために行われていた。 ・私たちでも出来そう。 ・海や街がきれいになるといいな。	・本時の学習につながる意見を想起することが出来るように工夫する。
	海水浴場に植樹を行うことのイメージを持とう。 2. 自分たちの町の海水浴場に植樹を行うことによるメリットについて考える。 〈予想される児童の反応〉 ・海水浴場の景色がきれいになる。 ・津波が来る前の海水浴場を取り戻すことが出来る。 ・波や風を防ぐことが出来る。 3. 海水浴場の周りに植樹をすることを確認しイメージ図を書き、共有する。（個→グループ） 5. イメージを基に活動についての見通しを持ち、次時に実際に植樹活動を行うことの見通しを持つ。	・町の復興に向けてという未来への視点を持つことが出来るように促す。 ・防災の視点からの意見が出るように留意する。 ・自分たちが植樹を行い、樹育った未来をイメージすることが出来るように促す。 ・次時に実際に植樹活動を行う計画を立てることを伝え、次時への見通しを持つことが出来るようにする 復興のために自分たちが出来る活動を考え、海水浴場への植樹を行うことへの見通しを持つことが出来る。【関・意・態】

【カリキュラム・授業開発コース（学卒）木村陽平】

石巻研修旅行

宮城教育大学教職大学院との交流 及び 石巻被災地訪問



カリキュラム・授業開発コース 学卒2年次
野坂 奨

研修内容

- ◇ 宮城教育大学教職大学院との研究交流
- ◇ 被災地への訪問

目的

- ・ 秋田大学と宮城教育大学の連携を強化する
- ・ 危機管理や防災教育を、実践から学ぶ
- ・ 教職大学院での学びを深め、新たな知見を得る

研修概要（日程）

1 日目

13:00-14:00
荒浜小跡地訪問

15:00-16:00
研究交流会

16:10-19:00
情報交換会

2 日目

10:00-11:00
大川小跡地訪問

10:00-11:00
雄勝小跡地訪問

11:30-15:30
防災・震災教育
プログラム

3 日目

9:00-10:00
登米市教育資料館
見学

10:30-11:30
南三陸町
さんさん商店街
視察



宮城教育大学教職大学院院生との研究交流会

1. 秋田大学から －秋田の授業力向上について－
2. 宮城教育大学から －被災地訪問から学んだこと－





研究交流会 – 秋田大学より –

テーマ：「秋田の授業力の継承と発展」

授業「秋田の授業力の継承と発展」
から学んだこと

◇「秋田の探究型授業」の理論



◇各教科による模擬授業

- ・ 事前研究
- ・ 事後研究 A（模擬授業後にその場で実施）
- ・ 事後研究 B（A を踏まえ、改善案を作成）

◎理論と実践の往還

◎校種・教科横断的な視点

◎明日の授業につなげる

研究交流会 – 宮城教育大学より –

テーマ：大川小学校・戸倉小学校
訪問から学んだこと



学部卒院生

「理科の時間において、津波による波の速度を学ぶことで、津波が来るのを確認してからでは遅いという切実感を生徒に与える」

→防災教育と教科教育との融合

現職院生

「時間をかけたベストの選択よりも、短時間でベターな選択を」

→危機管理における考え方

研究交流会 – 質疑応答から –

各教科で防災教育に関連する内容をどのように扱っているのか？



教育活動全体では？

学習課題の設定時に、子どもとの対話を通して学習課題を練り上げるとは、どのようなものか？

事後研究 A の意見交流をする際の配慮はどのようなものか？

教科横断的な実践は、どのようなことをしているのか？



被災地への訪問 – 石巻市立大川小学校跡地 –

◎実感を伴った理解

- ・ 海と川からの津波によって被災したこと。
- ・ 陸上の地形によって津波の高さは変化すること。

◎学校の判断について考える

- ・ なぜ50分もの間校庭で待機したのか
- ・ なぜ裏山に避難させなかったのか

当事者意識の高まり

「私たちが実際にその場にいたら適切な指示を出せていただろうか？」



被災地への訪問 - 石巻市立雄勝小学校跡地 -

◇保護者の佐藤麻紀さんの呼びかけ

→以前に教員・子ども・保護者で新山神社から裏山に逃げる避難訓練を行っていた。

避難マニュアルを教師・子ども・保護者で共有していたために，保護者が学校側の判断ミスを修正できた



防災教育プログラム —東日本大震災の巨大津波の 教訓から学ぶ津波防災教育—

講師：徳水 博志 先生



◇大津波警報は海岸到達予想津波の**平均的な値**である

◇津波は**海岸地形や陸上地形（構造物）**で**変化**する（1/2~2倍）

◇自分の地域の地形や構造物を理解し，地域を襲う津波の高さや特徴を**イメージ**して避難行動を取る必要性がある

◇ハザードマップを**過信しない**（想定外の自然現象が起きる）

震災教育プログラム －被災児の心のケアの教育実践－

◇震災後の子どもたちの“新たな荒れ”

→子ども理解の転換【**震災関連の病理を発症した子どもたち**】

◇災害の**意味づけ**,「**関係性の再構築**」を目指す学び

- ・復興市で南中ソーラン
- ・雄勝硯の工房で体験活動
- ・仮設住宅に雄勝石の表札のプレゼント
- ・復興まちづくりプラン など



雄勝ローズファクトリーガーデン

◎雄勝ローズファクトリーガーデンとは？

石巻市雄勝町を「花と緑の力」で復興するために、被災した住民が立ち上げた復興プロジェクトの活動拠点

◎設立の目的

- ・人口が激減した雄勝町を**持続可能な新しい町**につくり変えること。
- ・Uターンした若者やIターンした若者が雄勝に魅力を感じて、**震災復興の後継者**として定住してくれること。
- ・若者たちを、**グローバルな発想力と行動力を持つ若者**として育てること。



研修を終えて

－各自の感想より－

・マニュアルなど現在あるものの見直しを共同で進めていくことが大事だと感じた。

・地形によって津波が変わるという話から、勤務校及び周辺の地形、さらには歴史を知っておくことの重要性を学んだ。

・徳水先生のマイナスの体験から目をそらすことなく、しっかり向き合うことでのりこえさせていく教育の方法や教え方は、日常の生徒指導等にも生かせることだと感じた。



荒浜小学校跡地

・宮城教育大の現職院生が訴えた、新任校へ行った際には、自校の防災・避難マニュアルを確認するといった視点は、今後意識して持ち続けたいと思った。

・この研修で得た「実体験」を想像力に加えて、避難訓練やいざというときに生かしていきたい。

・今回のような取り組みを教職大学院のみならず、県としての取り組みにしてほしいと願う。

・学校でどのようにして子どもの命を守るかは、日頃の備えが9割、現実になったときの判断が1割のような気がする。

・被災地として人が集まるのではなく、住む場所となるにはどのように変化していくのか・・・と考えた。

